

# 石ヶ迫遺跡

2004年

日田市教育委員会

巻頭写真図版



石ヶ迫遺跡B地区空中写真（南東より）

## 序 文

大分県日田市は周囲を1,000m級の山々に囲まれた盆地であります。この地形的な特性から古来より林業が盛んな地域で、日田杉といえば秋田・吉野と並んで日本三大美林に数えられるほど有名になりました。

しかし折からの不況と輸入材建築の増加により国産木材の需用が冷え込み、当市の基幹産業と言える林業も危機を迎えたため、その打開策としてウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）が計画されました。本書はこのウッドコンビナート建設事業に伴って発掘調査を実施した有田塚ヶ原遺跡群のうち、石ヶ迫遺跡の調査内容をまとめたものです。

調査では縄文時代から古代にいたる人々の生活の跡や、現代まで連綿と続く水田の跡などが発見され、狭い谷を水田化して集落を拡大する様子がうかがえる、貴重な資料となりました。

本書が、文化財の保護や地域の歴史、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました市林政課や地権者の方々、調査中にご支援を賜りました大分県文化課の職員の方々、ならびに作業に従事いただきました地元の皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月

日田市教育委員会

教育長 講 山 康 雄

## 例　　言

1. 本書は、市林政課が計画・実施したウッドコンビナート建設推進事業に伴い、平成6年度～9年度に市教育委員会が実施した有田塚ヶ原遺跡群発掘調査のうち、平成7年度に実施した石ヶ迫遺跡の発掘調査報告書であり、「ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1」と位置付ける。
2. 調査にあたっては市林政課、工事関係者および地元の方々にさまざまご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
3. 調査現場での遺構の実測は調査担当者が実施し、荏隈典子・財津真弓の協力を得た。写真撮影は行時（桂）が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測は埋蔵文化財サポートシステムに委託し、一部行時（桂）が行った。遺構・遺物の製図は土居和幸・行時（桂）のほか藤野美音（日田市教育委員会文化課調査補助員）が行った。
5. 空中写真是スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。
6. 遺物の写真撮影は長谷川正美氏（有限会社雅企画）に委託し、その成果品を使用した。
7. 掘図中の方位および文中の方位角は磁北を示す。
8. 写真図版の遺物に付した番号は、実測図番号に対応する。
9. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 本書の執筆はI・IIを土居が、その他を行時（桂）が行い、編集は土居と協議のうえ、行時（桂）が行った。



## 本文目次

はじめに .....	1
I 調査の経緯 .....	3
第1節 調査にいたる経過 .....	3
第2節 石ヶ迫遺跡の調査 .....	3
第3節 調査組織 .....	4
II 遺跡の立地と環境 .....	6
III 調査の内容 .....	9
第1節 調査の概要 .....	9
第2節 A地区の調査 .....	10
第3節 B地区の調査 .....	14
(1) 壺穴住居 .....	14
(2) 掘立柱建物 .....	27
(3) 土 坑 .....	32
(4) 落とし穴遺構 .....	34
(5) 集 石 .....	34
(6) 包含層 .....	37
(7) 水 田 .....	40
(8) その他の遺構出土遺物 .....	42
(9) その他の出土遺物 .....	43
IV まとめ .....	44

## 挿 図 目 次

- 第1図 ウッドコンビナート計画位置図 (1/15,000)  
第2図 ウッドコンビナート計画地（I期工事）内遺跡位置図(1/7,500)  
第3図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)  
第4図 石ヶ迫遺跡A・B地区位置図 (1/4,000)  
第5図 A地区遺構配置図 (1/400)  
第6図 A地区北半拡大図 (1/200)  
第7図 A地区土層図 (1/100)  
第8図 A地区出土遺物実測図 (1/3、1/2)  
第9図 B地区遺構配置図 (1/600)  
第10図 1・2号竪穴住居・同カマドおよび出土遺物実測図 (1/60、1/30、1/3)  
第11図 3号竪穴住居実測図 (1/60)  
第12図 3号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)  
第13図 4号（A・B）竪穴住居実測図 (1/60)  
第14図 4号B竪穴住居カマド実測図 (1/30)  
第15図 4号（A・B）竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)  
第16図 5・6号竪穴住居・同カマドおよび出土遺物実測図 (1/60、1/30、1/3)  
第17図 7号竪穴住居実測図 (1/60)  
第18図 7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、1/4)  
第19図 8号竪穴住居実測図 (1/60)  
第20図 8号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)  
第21図 9号竪穴住居および出土遺物実測図 (1/60、1/3)  
第22図 1・2号掘立柱建物実測図 (1/80)  
第23図 3・4・5号掘立柱建物実測図 (1/80)  
第24図 6・7・8（A・B）号掘立柱建物実測図 (1/80)  
第25図 9・10・11・12号掘立柱建物実測図 (1/80)  
第26図 5号掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)  
第27図 土坑実測図 (1/60)  
第28図 土坑出土遺物実測図 (1/3)  
第29図 落とし穴遺構実測図 (1/40)  
第30図 1号集石および出土遺物実測図 (1/20、1/3)  
第31図 2号集石実測図 (1/20)  
第32図 3号集石実測図 (1/20)  
第33図 4号集石実測図 (1/20)  
第34図 5号集石実測図 (1/20)  
第35図 5号集石出土遺物実測図 (1/3)  
第36図 繩文包含層実測図 (1/150)  
第37図 繩文包含層出土遺物実測図 1 (1/3、1/2)

- 第38図 繩文包含層出土遺物実測図2 (1/3、1/4)  
第39図 水田トレンチ土層図 (1/50)  
第40図 水田トレンチ出土遺物実測図 (1/3、2/3)  
第41図 その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、2/3)  
第42図 その他の出土遺物実測図 (1/3、2/3)

## 挿入写真目次

- 写真1 B地区作業風景  
写真2 A地区作業風景

## 表 目 次

- 第1表 ウッドコンビナート建設事業に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査年次および関連文献表  
第2表 出土土器観察表1  
第3表 出土土器観察表2  
第4表 出土土器観察表3  
第5表 出土石器観察表  
第6表 出土土製品観察表

## 写真図版目次

- 巻頭写真図版 石ヶ迫遺跡B地区空中写真（南東より）  
図版1 ウッドコンビナート計画地（I期工事）空中写真（東より）  
図版2 A地区 調査前風景／全景（南より）／全景（北より）／調査区北壁土層  
1号溝／2号溝／フイゴ口出土状況  
図版3 B地区 全景（真上より）／1号竪穴住居（南より）／1号竪穴住居と1～  
4号掘立柱建物／2号竪穴住居（南より）／2号竪穴住居カマド  
図版4 B地区 3号竪穴住居（真上より）／3号竪穴住居（南より）／4号（A・  
B）竪穴住居（南より）／4号B竪穴住居カマド／5号竪穴住居（南  
より）／5号竪穴住居カマド／6号竪穴住居（南より）／6号竪穴  
住居カマド

図版5 B地区 7号竪穴住居と11号掘立柱建物（真上より）／7号竪穴住居土器出土状況1／7号竪穴住居土器出土状況2／7号竪穴住居土器出土状況3／8号竪穴住居（南より）／8号竪穴住居カマド／8・9号竪穴住居および12号掘立柱建物（真上より）／9号竪穴住居（北より）

図版6 B地区 4～6号掘立柱建物と8号掘立柱建物（真上より）／2～6号竪穴住居（真上より）／9号掘立柱建物（真上より）／10号掘立柱建物（真上より）／1号土坑（北より）／1号集石／2号集石／3号集石

図版7 B地区 4号集石／4号集石切り取り風景／5号集石／縄文包含層遺物出土状況（2号集石周辺）／1号集石打製石斧出土状況／縄文土器出土状況（2号集石周辺）／プラントオパール試料採取風景／水田層とプラントオパール試料採取位置

図版8～10 A・B地区出土遺物



写真1 B地区作業風景

## はじめに

石ヶ迫遺跡はウッドコンビナート建設地内で確認された有田塚ヶ原遺跡群のうちの1つである。同地内にて発掘調査を行った遺跡および関連文献については次ページの一覧表を参照されたい。

ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群埋蔵文化財発掘調査の経緯については次章で詳しくまとめるが、今回刊行する「石ヶ迫遺跡」を「ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1」と位置付け、以下2、3…と順次刊行することとする。

なお発掘調査および整理作業は市ウッドコンビナート推進室主管事業として行ったが、整理作業の一部および報告書の刊行については、平成10年4月における機構改革により同推進室が林政課に組み込まれ林政課ウッドコンビナート推進係となり、さらに平成14年4月にはウッドコンビナート推進係は構造改善係に統合され、ウッドコンビナート推進関連事業が一段落したことから、林政課主管事業としてではなく、文化課主管事業（報告書作成事業）として行うこととなった。

石ヶ迫遺跡発掘調査については、調査段階および既刊行の概報では“A地点”“B地点”と呼称していたが、今回の報告によりこれらを“A地区”“B地区”と改めることとする。

また既刊行の概報等に記載された遺構の数量とは異なる場合があるが、これは概報刊行後に精査を行った結果変更となったものであり、今回の報告を正式なものとする。



第1図 ウッドコンビナート計画位置図 (1/15,000)

第1表 ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および関連文献表

遺跡名	調査年度	関連文献名
平島横穴墓群	平成6～7年度	行時志郎他 / 「5 平島横穴墓群」『平成6年度(1994年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1996年 行時志郎他 / 「2 平島横穴墓群(HIS Y)」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年
石ヶ追跡A・B地区	平成7年度	松下桂子 / 「4 石ヶ追跡(IGS)」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年
クビリ遺跡	平成7年度	行時志郎他 / 「6 クビリ遺跡(KBR)」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年
有田塚ヶ原遺跡	平成7年度	行時志郎他 / 「9 有田塚ヶ原遺跡(AT H)」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年
紙園原遺跡	平成7～8年度	行時志郎他 / 「1 紙園原遺跡(GOB)」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年 行時志郎他 / 「1 紙園原遺跡(GOB)」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年
尾漕2号墳	平成8～9年度	行時志郎他 / 「5 尾漕2号墳(OKG-2)」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年 行時志郎他 / 「1 尾漕2号墳(OKG-2)」『平成9年度(1997年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1999年
長迫遺跡A・B地点	平成8～9年度	行時志郎 / 「7 長迫遺跡(NSK)」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年 行時志郎他 / 「2 長迫遺跡A・B地点(NSK-A・B)」『平成9年度(1997年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1999年
有田塚ヶ原遺跡群全般	—	『有田塚ヶ原遺跡群』(概要報告) / 日田市教育委員会/1999年



第2図 ウッドコンビナート計画地(1期工事)遺跡位置図(1/7,500)

- 1. 紙園原遺跡
- 2. 長迫遺跡B区
- 3. 長迫遺跡A区
- 4. 尾漕2号墳
- 5. 石ヶ追跡A地区
- 6. 石ヶ追跡B地区
- 7. クビリ遺跡
- 8. 有田塚ヶ原遺跡
- 9. 平島横穴薄壁

## I 調査の経過

### 第1節 調査にいたる経過

ウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）は、日田市の基幹産業である木材業界の長期不況と深刻な労働力不足を打開し、また大分県が策定した日田・玖珠・下毛といった県西部の林業・木材産業の活性化を目指したグリーンボリス構想に基づいて、木材供給の基地として日田市に計画された。平成2年には基本調査、翌3年には基本計画書が作成され、平成5年には日田市役所内にウッドコンビナート推進室が設置されると、平成7年度から平成10年度までの4年間を第1期とする開発面積が677,315m<sup>2</sup>にもおよぶ広大な建設工事が進められることとなった。

こうした工事着手に先立つ平成6年8月8日には、ウッドコンビナート推進室長名で埋蔵文化財の所在についての事前協議書が市教委に提出された。これを受けた市教委は対象範囲が広く、埋蔵文化財の所在する可能性が高い場所であることから、現地の分布調査を実施することとし、遺跡有無の確認作業を行なった。この現地踏査の結果、遺跡が確認されたあるいは可能性のある場所を①平島横穴墓群地区、②石ヶ迫地区、③祇園原地区、④尾瀬2号墳地区、⑤塚ヶ原地区、⑥長迫地区、⑦クビリ地区、⑧柿ノ木原地区、⑨小原地区、⑩尾瀬地区的10ヶ所に分けて試掘調査を実施することとした。

試掘調査は対象地区内の用地買収や樹木の伐採が完了していないことから、作業員による手作業でのトレンチ掘りとし、平成6年8月26日から9月30までの間実施した。調査では⑧柿ノ木原地区、⑨小原地区、⑩尾瀬地区的3ヶ所においては遺跡が存在しなかつたが、他の7ヶ所の地区では遺跡の存在が確認されたことから、これらの取扱いについて協議を行うこととなった。

協議の結果、発掘調査は用地買収や樹木の伐採が終えた場所から随時行うこととし、平成6年2月から平島横穴墓群、同8月から石ヶ迫遺跡、平成8年1月からクビリ遺跡、同2月から有田塚ヶ原遺跡、3月から祇園原遺跡、12月から尾瀬2号墳・長迫遺跡の順に進め、平成9年7月には尾瀬2号墳と長迫遺跡の調査の終了をもって現地での全ての作業は完了した。

その後、平成7年度から整理作業を平成14年度まで継続して行い、整理作業が終了した平成15年度から調査報告書を継続的に発行する運びとなった。

### 第2節 石ヶ迫遺跡の調査

調査の経過等の概要については、以下のとおりである。

平成7年度

平成7年8月4日 A地区の表土剥ぎを始める。（～25日）

8月17日 A地区の遺構検出を開始する。

8月20日 遺構実測を始める。

8月28日 B地区の表土剥ぎを始める（～9月6日）

9月1日 B地区の遺構検出を開始する。

11月25日 空中写真撮影を行なう。

平成8年1月31日 プラントオバール分析の試料を採取する。

2月28日 調査作業を完了する。

平成8年度

平成9年3月22日 出土遺物の実測を業者に委託する。 (～3月31日)

### 第3節 調査組織

発掘調査から報告書作成までの関係者は、以下のとおりである。なお、調査時の職名は、当時のままとしている。

平成7年度／発掘調査・整理作業

日田市林政課

坂本 勇（日田市林政課長）新川正義（同ウッドコンビナート推進室長）、和田忠義（同次長）、山本宗一（同係長）、熊谷哲郎（同専門員）、原田文利（同主査）、佐藤長喜（同主任）

日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導 佐々木章（大分短期大学）山田拓伸（大分県立宇佐風土記の丘）

調査事務 原田良伸（日田市教育委員会文化課長）、財津寅日出（同課長補佐兼文化財係長）、  
佐々木美保（同臨時職員）

調査担当 行時志郎（同主任）松下桂子（同主事補）、森山敬一郎（同嘱託）

調査員 土居 和幸（同主任）永田 裕久（同主事補）

発掘作業員 秋ヤエ子、秋月貴雄、穢本進、穢本文雄、安達義雄、荒木邦彦、有富力、有富雪子、石井定美、石井ツヤ子、池内剛、池辺和徳、諫山トシ子、諫山美代子、  
諫山洋介、石田ミヤ子、石松由梨江、伊藤キヨ子、伊藤孔、井上修吉、井上大輔、井上ノブ工、井上正隆、岩田真吾、宇藤モト、梅山和久、江藤キミ子、荏限キミ工、荏限哲、荏限典子、荏限ふみ、荏限マサ子、荏限政子、荏限正美、  
荏限雪子、江浜和博、大関洋、大坪伸介、小堀純一郎、小野多美子、加賀寿一、  
梶原英治、梶原シゲ子、梶原シゲヨ、梶原英俊、梶原利徳、鍛治谷アサヨ、鍛  
治谷節子、川津正雄、河原猛、北澤幾子、木下富三郎、木下裕子、五島勇美子、  
五反田静子、後藤亨、小山龍彦、酒井光敏、佐藤カスミ、佐藤キクエ、佐藤み  
代子、貞清百合子、財津歎子、財津静子、財津折三、財津利枝、財津真弓、財  
津由太、坂本アキノ、坂元登、佐藤和也、佐原正弘、島田真由子、清水忠造、  
庄内武子、菅田クマエ、菅田三郎、菅田初夫、菅田ミヤ子、園田光子、園田義  
雄、高瀬剛樹、高瀬洋、高倉厚巳、高倉ハナ子、高倉秀雄、高倉富美子、高倉  
美津子、高倉美利、高倉裕一、高倉六郎、武内アイ子、武内公平、田中昇、津  
江久徳、中島和子、中島キクエ、中島ツネ子、中島トミ工、永瀬いずみ、中野  
哲郎、中野ヨシ子、鍋倉敬祐、西美那子、原田直宏、樋渡松代、深町彰大、福  
沢洋一、前善知、松岡登美子、松岡初次、松竹智之、松本トキ工、森めぐみ、  
森山好美、了正ミヨ子、矢羽田圭、矢羽田賢二、山口勇介、吉野牧夫、和田徹  
二郎、渡辺暢、渡辺千美子、渡辺芳五郎

整理作業員 穴井トヨ子、伊藤弘子、甲能京子、後藤陽子、坂本和代、宿利知美、羽野恭子、  
馬場ゆかり、吉田千津子、和田桂子

来訪者 賀川光夫（別府大学）、池田栄史（琉球大学）、渋谷忠章、清水宗昭、高橋徹、江田豊、染矢和徳、吉田博嗣、渡部桂司（大分県文化課）、今田秀樹（天瀬町教育委員会）、佐藤祐二（玖珠町教育委員会）。

平成8年度／整理作業

日田市林政課

財津洋之助（日田市林政課長）、新川正義（ウッドコンビナート推進室長）、和田忠義（同次長）、熊谷哲郎（同係長）、原田文利（同主査）、佐藤長喜（同主任）、江島秀吉（同技師）

日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査事務 原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長）、森山一宏（同主任）、衛藤和美（同臨時職員）、竹原里香（同臨時職員）

整理担当 行時志郎（同主査）、松下桂子（同主事補）

調査員 土居和幸（同主任）

整理作業員 穴井こずえ、井上とし子、宇野富子、宇野理紗、荏隈香苗、大口友里子、小埜和美、梶原ひとえ、川原君子、河原直美、甲能京子、坂本和代、坂本則子、相良由香、佐々木美保、佐藤美和、田中静香、聖川暢子、平川穂子、藤原亜衣、溝口さや香、森山奈美江、吉田千津子

平成15年度／報告書作成

日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）～平成15年7月

諫山康雄（ 同 教育長）平成15年8月～

調査事務 後藤 清（日田市教育委員会文化課長）、佐藤晃（同主幹兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同主査）

報告書担当 行時桂子（同主任）

調査員 土居和幸（同主査）

## II 遺跡の立地と環境

### (1) 地理的環境

福岡県とは県境をなす大分県の西部にあたり筑後川の上流域に位置する日田市は、標高80m前後の沖積地が現在の市街地となり、この周囲を標高150mの阿蘇4火砕流による溶岩台地が巡り盆地景観を形成し、さらに外周は標高200～600mの耶馬溪溶岩台地が、市の境界域には700～1000m級の山々が連なっている。このため、夏は暑く、冬は寒いという盆地特有の気候条件をなす。こうした山々を源とする大小の河川は、周辺の溶岩台地の谷間を縫うように沖積地へと流れ込み、北からは花月川や二串川、東からは玖珠川、南からは大山川や高瀬川、内河野川などがそれぞれ合流して筑後川となり、有明海へと流れている。

石ヶ迫遺跡のある有田塚ヶ原遺跡群は盆地東部の大字東有田内に位置し、花月川の支流である有田川と求来里川との合流地点の東側に立地する。この遺跡の場所は日田盆地の市街地からはやや離れ、近世期には日田盆地が江戸幕府の直轄地であったのに対し、この東有田は玖珠の森藩久留島氏の領地となっていた地域である。有田塚ヶ原遺跡群の各遺跡は、阿蘇火砕流によって形成された台地を中心に立地しており、この台地は千田昇氏の分類によれば「阿蘇4火砕流堆積面」に相当し、沖積地からは緩やかな斜面をなす谷部もみられるが、全体的には急な斜面部が多い。こうした立地条件は有田川や求来里川流域に見ることができ、台地上には古墳が造られ、谷部から沖積地には集落跡が存在している。こうした有田塚ヶ原の台地の湧水によって形作られた小さな谷の一つに石ヶ迫遺跡はある。この小谷は標高が116～136mで、谷の幅が50m前後、湧水点から沖積地までは約800mで、大きく「く」状に屈折している。湧水地点の斜面には平島横穴墓群が営まれている。

### (2) 有田塚ヶ原遺跡群の遺跡

石ヶ迫遺跡を含む有田塚ヶ原遺跡群では、平島横穴墓群（22）、祇園原遺跡（11）、尾漕2号墳（16）、有田塚ヶ原遺跡（24）、長迫遺跡（15）、ケビリ遺跡（23）が調査されている。今後、こうした遺跡の内容については随時報告予定であるが、ここでは簡単に各遺跡の概要をまとめる。

平島横穴墓群は谷の斜面を利用した6世紀中頃と6世紀後半から7世紀前半の総数86基の横穴で構成される。人骨の残りは良くないが、鉄器類（鉄刀、鐵鎌、弓具、馬具等）や玉類、装身具などの副葬品が出土している。

祇園原遺跡は有田塚ヶ原台地突端部に営まれた弥生時代中期から後期の集落跡で、竪穴住居24軒をはじめ掘立柱建物跡、小児用甕棺墓などが発掘されている。竪穴住居は円形と方形プランのものがあり、住居の平面形の変化を知る上では注目され、さらに掘立柱建物には大型の建物や棟持柱建物がある。

尾漕2号墳は丘陵頂部に造られた円墳で、調査の結果、直径約25m、高さ約3mの規模を測る。主体部は凝灰岩を用いた2基の箱式石棺墓からなり、第1主体部からは3体の人骨と直刀、刀子、櫛などの副葬品が出土しており、4世紀末～5世紀始めの築造と推定されている。この2号墳の南側には横穴式石室を主体部とし、須恵器や小玉などの副葬品が出土した5世紀末に築造されたとされる1号墳（19）が存在する。

有田塚ヶ原遺跡は台地上にあり、縄文時代の落し穴30基と奈良時代の建物5棟が発見されている。また、遺跡の南側では径10m前後、現状での高さ1.5mを測る有田塚ヶ原1号墳（25）が調査され

ており、須恵器や鉄器類、馬具、玉類などの副葬品が出土している。この古墳は6世紀後半の築造と考えられている。

長迫遺跡は尾瀬2号墳のすぐ北側の狭い谷部にある遺跡で、古墳時代と奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物などが多数発見されている。さらに、この調査区西側のC・D地点でも同様の時期の遺構が発掘されており、該期の大規模な集落跡の存在が明らかとなっている。

クビリ遺跡では奈良時代の鍛冶に関係する鉄滓や刀子、鉄鎌、鎌、砥石などの遺物が出土している。

### (3) 周辺の遺跡

こうした有田塚ヶ原遺跡群の周辺では道路やほ場整備などの開発に伴う遺跡の発掘調査が数多く実施されており、こうした事例を中心に周辺の遺跡を概観する。

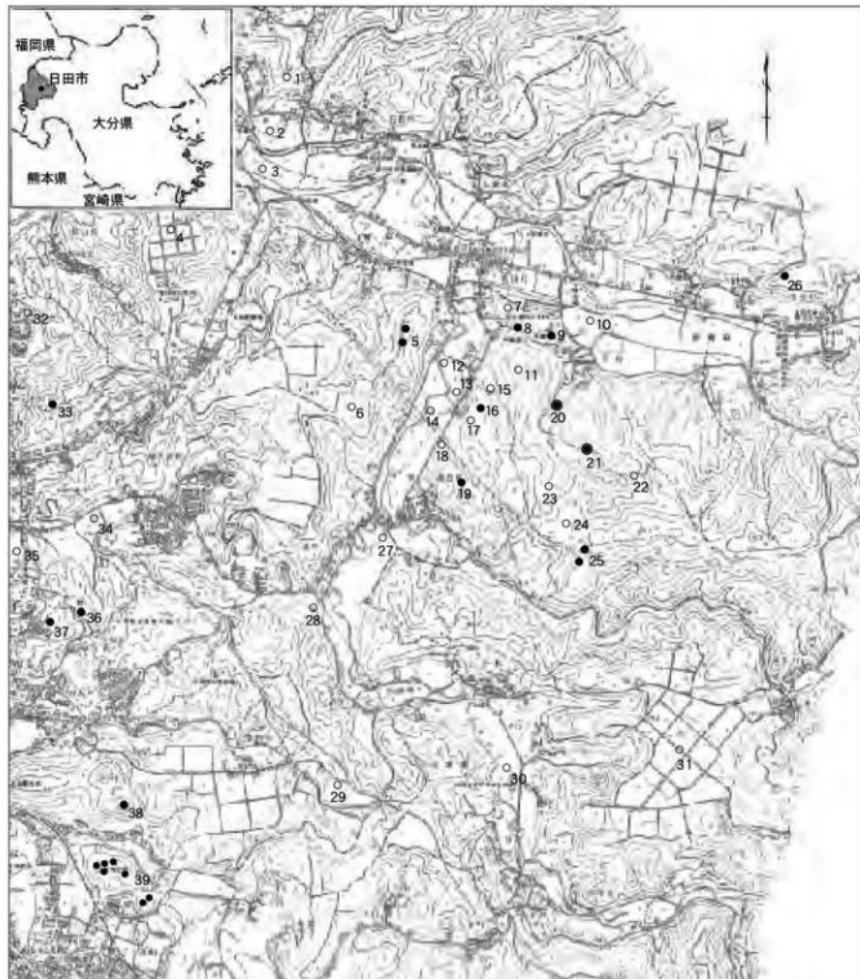
まず、求来里川流域の遺跡には弥生時代から古墳時代、中近世の集落跡や310枚前後の銭貨を副葬する中世墓が発見された大規模遺跡である尾瀬遺跡（12～14、18）、縄文時代晚期前半の埋甕などが発見されている森ノ本遺跡（27）、6世紀後半から8世紀前半の集落跡や9世紀中頃から後半の土壙墓2基が確認されている馬形遺跡（28）、円墳3基で構成される中尾古墳群（5）があり、上流域には5世紀から6世紀の集落などが調査された求来里平島遺跡（30）や旧石器の資料が採集されている町野原遺跡（31）が存在する。

次に、有田川流域では主体部が単室両袖式の横穴石室を有する直径約12mの円墳で、6世紀前半の築造と考えられている塔ノ本古墳（8）、円墳で現在市の史跡に指定され保存されている平島古墳（9）、弥生時代後期の環濠集落と古墳時代後期の集落が発掘されている平島遺跡（10）、5世紀の前方後円墳と推定される城山古墳（26）などが分布しており、下流には古墳時代から古代の集落跡が調査された大行事遺跡（1）、弥生時代と古代の集落や墓が発見された内ノ下遺跡（2）、古代の集落や墓が確認された川原田遺跡（3）、弥生時代の集落や墳墓が調査された佐寺原遺跡（4）などが位置する。

このほか、遺跡の西側には中世大蔵氏に関係する堀などが発見された慈眼山瀬戸口遺跡（32）、円墳で主体部が箱式石棺と推定されている丸山古墳（33）、縄文時代から中世までの複合遺跡である赤迫遺跡（34）、奈良時代の墨書き土器が発見された大波羅遺跡（35）、円墳である丸尾神社古墳（36）、円墳で直径が約35mの薬師堂山古墳（37）、円墳で横穴式石室を主体部とする北向古墳（38）、4号墳が装飾古墳として知られている法恩寺山古墳群（39）などがある。

#### 参考文献

- 千田 翼 「日田・玖珠地域の地形ーとくに台地地形についてー」『日田・玖珠地域-自然・社会・教育-』 大分大学教育学部 1992年  
行時志郎編『有田塚ヶ原遺跡群』 日田市教育委員会 1999年  
田中裕介他編『小迫辻原遺跡 I A・B・C・D地区編』 大分県教育委員会 1999年



1 大行事遺跡	8 塔ノ本古墳	15 長迫遺跡A～C区	22 平島横穴墓群	29 元宮遺跡	36 丸尼神社古墳
2 内ノ下遺跡	9 平島古墳	16 尾瀬2号墳	23 クビリ遺跡	30 求来里平島遺跡	37 菩師堂山古墳
3 川原田遺跡	10 平島遺跡A～C区	17 長迫遺跡D区	24 有田塚ヶ原遺跡	31 町野原遺跡	38 北向古墳
4 佐寺原遺跡	11 瓢園原遺跡	18 尾瀬遺跡1次	25 球ヶ原古墳群	32 慈眼山山麓戸口遺跡	39 法恩寺山古墳群
5 中尾古墳群	12 尾瀬遺跡5次	19 尾瀬古墳	26 城山古墳	33 丸山古墳	
6 中尾原遺跡	13 尾瀬遺跡4次	20 石ヶ迫遺跡A地区	27 森ノ元遺跡	34 赤迫遺跡	
7 平島遺跡D・E区	14 尾瀬遺跡2次	21 石ヶ迫遺跡B地区	28 馬形遺跡	35 大波羅遺跡	

第3図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

### III 調査の内容

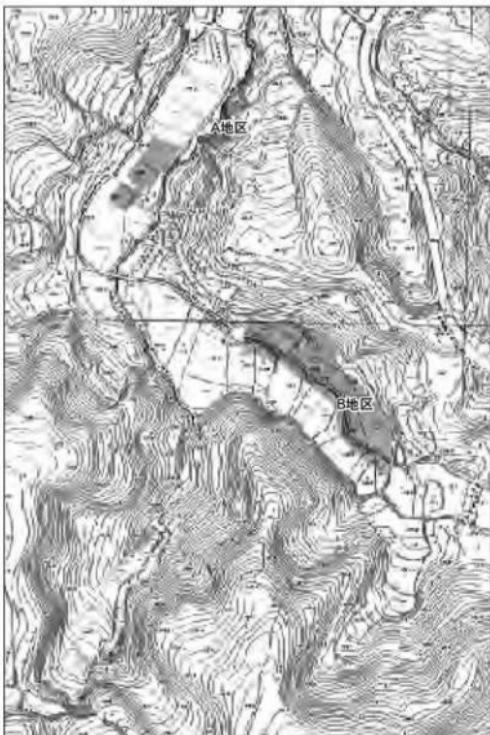
#### 第1節 調査の概要

石ヶ迫遺跡一帯の調査前の地勢は、阿蘇溶結凝灰岩を岩盤とする丘陵に挟まれた幅約50m、長さ約800mの「く」の字状に展開する狭い谷であった。この谷では、最奥の平島横穴墓群の築かれた場所に溜池が設けられ、そこから谷の両端に取り付けられた水路から水を引き入れる形の棚田が平島集落のある谷の入り口付近まで続いていた。石ヶ迫遺跡は、試掘調査で遺構が確認された地区のうち、谷の入り口付近での調査区をA地区、奥をB地区とするが、B地区一帯は、これらの棚田よりも数メートル段丘状に高くなっている。ここでは主に畑作が営まれていた。

次節で詳しく説明するが、石ヶ迫遺跡で確認された遺構のうち、居住の跡が確認されたのはこの段丘状の場所（B地区）のみであり、それ以外の場所（A地区やB地区南側）では、現在の地勢と同様の生産（水稻栽培）に関連する遺構のみであった。このことは、遺跡が営まれた当時の地形がそのまま現在まで残っていたことを示すものであり、当時と現在の土地利用の様子を比較するうえで興味深いことである。

調査は水田で樹木の伐採等の必要がないA地区から開始した。この地区では灰褐色系の粘質土に掘り込まれた、溝などの遺構が検出された。遺構は調査区南側へは展開せず、北側に向かって展開していく様相であったが、この調査区までが事業予定地の範囲であったため、ここで調査をとどめることにしている。

B地区は畑地耕作の行われている緩斜面から、周辺の樹木の伐採完了をみて調査を開始した。この地区では竪穴住居など多数の遺構が、主に調査区西半から北東側（丘陵側）にかけて広がっていた。しかし東半ではほとんど遺構は検出されず、このことはもともとならかであった斜面を、畑地として造成する際にカットされたためと思われる。このため、B地区的調査は、遺構の主に検出された区域を中心広げることにした。



第4図 石ヶ迫遺跡A・B地区位置図 (1/4,000)

## 第2節 A地区の調査（第5～8図）

A地区は谷の入り口部にあたり、調査前は水田として利用されていた。現水田の盤土層を除去するとそれ以前の水田層が数層確認され、さらにその下から複雑に合流する溝のほか、数個のピットが検出された。造構検出作業は溝が検出された層で一旦広げることにしたが、第7図の土層①に見るよう、この層の下にも遺物包含層が確認された。この包含層は、6層の底面が比較的平坦で、鉄分を含んだ盤土状の痕跡が確認されたことから、水田跡であることが推察された。なお、この層より下の調査はトレンチのみの確認調査にとどめている。以下、主な造構について説明を加える。

1号溝は調査区北端で確認された。調査区内をL字状に屈曲し、調査区外へ延びる。西壁から屈曲部までの長さ約8.4m、屈曲部から北壁までの長さ約7.6mを測る。またこの溝の屈曲部には南方向からこの溝に接続するように延びる溝が確認されている。この溝は溝同士の切りあい関係が確認できないので、同時期に存在した溝と考えられる。溝の断面はV字形を呈し、土層観察からその底部には砂層が形成され、不規則な堆積をしていた様子がうかがわれるところから、溝の使用時には水が流れていたものと考えられる。

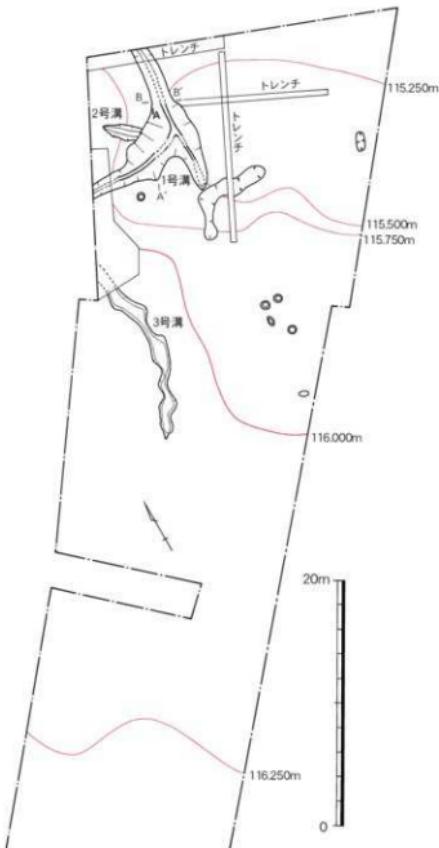
2号溝は調査区北半の西壁そばから1号溝に向かって伸び、1号溝に切られる。溝の残存長約3.2m、幅約1.2m、深さ約25cmを測る。1号溝と比較して浅く、また立ち上がりも緩やかである。溝の中からは遺物の出土はなかった。

3号溝は調査区中央あたりから西壁に向かって蛇行しながらのびる。長さ約8m、幅約70cm、深さ10～15cmを測る。

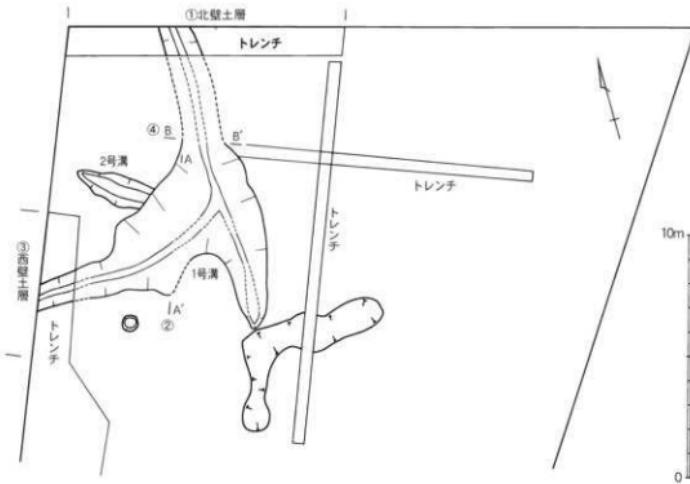
上記の溝以外に、平面的には確認できなかったが、トレンチの土層観察の結果確認された溝がある。第7図の土層②の1層や土層③の3層、土層④の1～3層がこれにあたり、このことから推定して、この溝は1号溝と交錯しながら北に伸びていたと思われる。1号溝の掘りなおしである可能性も考えられる。

次に、A地区から出土した遺物について説明を加える。

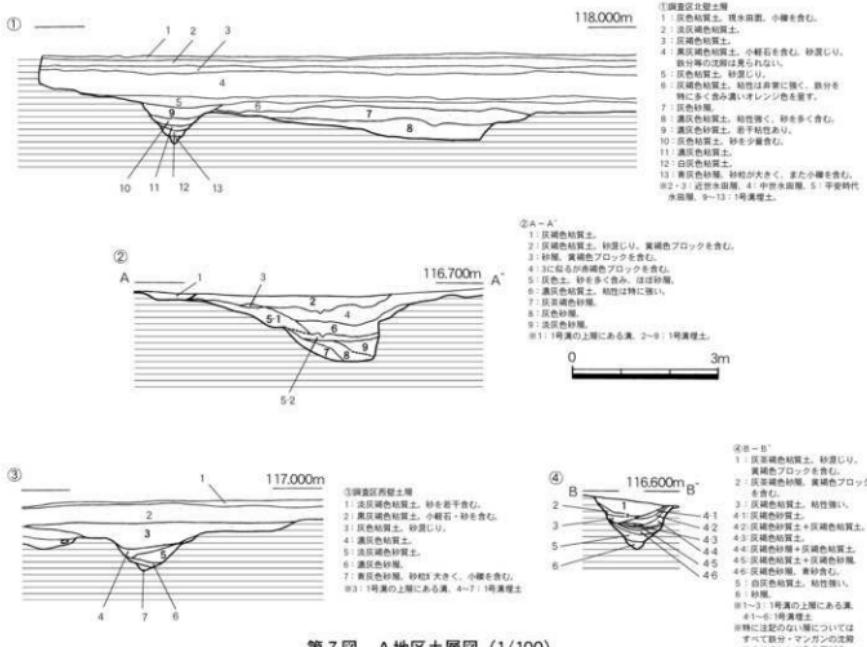
第8図1・2は1号溝屈曲部埋土から出土した須恵器塊である。1は立ち上がりが



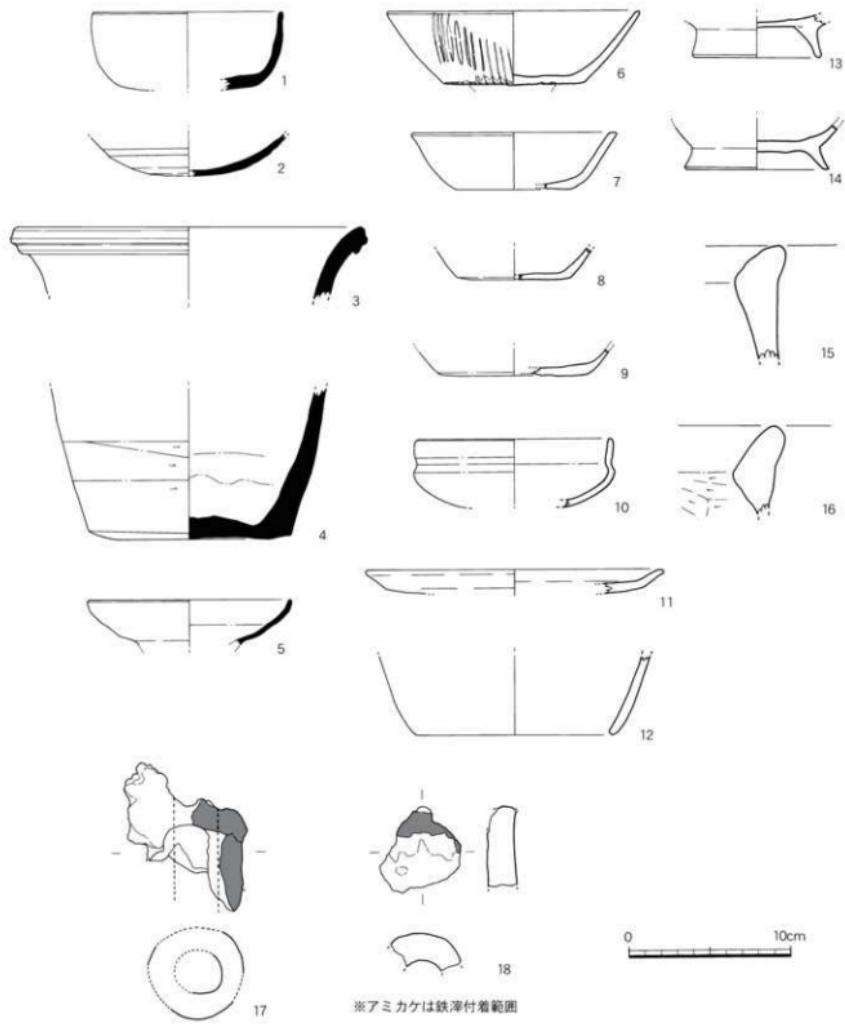
第5図 A地区造構配置図 (1/400)



第6図 A地区北半拡大図 (1/200)



第7図 A地区土層図 (1/100)



第8図 A地区出土遺物実測図 (1/3、1/2)

長く、口縁までほぼ直線に伸び、口縁端部で若干開き気味になる。3は1号溝埋土中から出土した須恵器甕または壺の口縁である。口縁部を斜め下方に肥厚させ、肥厚部の中央に沈線を施すことで段をつけている。焼成は良好で、内面から外面の一部にかけて薄く自然釉が付着している。4は西壁ぎわのトレンチの最下層である砂層から出土した須恵器壺である。底部は平底であるが、わずかに上げ底気味となる。焼成は普通で、外面には自然釉が付着している。5は西壁ぎわトレンチ出土の須恵器甕の口縁部である。薄く丁寧に仕上げられ、焼成は良好で、内外面ともに薄く自然釉が付着している。6は土師器高坏である。西壁ぎわトレンチからの出土で、内面口縁部の一部に布目痕があり、外側には工具を押し当てるような細い圧痕がみられ、その部分は器形も歪みが生じている。底部外面中央には渦巻状の痕が残っており、未調整であったと思われる。7~10は土師器坏である。7・8は1号溝付近より出土。9・10は1号溝屈曲部埋土より出土。10は緩やかにカーブして立ち上がる底部・体部から、頸部で一度内湾し、口縁部に向かって若干開き気味に直立する。口縁部は、端部は丸く治めているものの、体部に比べてやや厚みをもたせている。11は1号溝埋土中より出土した土師器皿である。比較的厚みのある底部から、短い口縁部がかなり開いて立ち上がる。12は1号溝屈曲部埋土より出土した土師器甕である。13・14は土師器塊の底部である。ともに磨耗が激しく、器面調整は不明である。13は溝に伴う土層①第6層出土の遺物である。14は1号溝付近より出土。15・16は土師器甕の口縁である。17・18はフイゴ羽口である。17は1号溝近くの水田層中から出土した。内面はおもに赤灰色を呈し、かなり高温で被熱した様子がうかがえる。外面の一部には薄く鉄滓が付着している。18も同様である。19は1号溝一括遺物の石庖丁である。両端部を欠く。安山岩製。



写真2 A地区作業風景

### 第3節 B地区の調査

B地区はA地区から谷を200mほど遡ったところにある。調査は丘陵裾部で段々状の畠として利用されていた区域から遺構検出を進めたが、ここでは縄文時代や古代の遺構が多数検出された。統いて現水田部分の遺構検出に移っていったが、ここではトレンチを設定し、遺構検出面を定めるため地山面まで掘り下げた結果、幾層にも水田跡と考えられる水平な堆積をした遺物包含層が確認された。この結果から、広範囲に調査区を広げても、当該時期の包含層が谷一帯に確認されるにすぎないと判断し、遺構検出は古代の遺物が出土した第39図の14層とどめ、部分的に広げるにとどめた。

この地区的主な遺構は竪穴住居9軒、掘立柱建物13棟、土坑7基、落とし穴遺構1基、集石5基のほか、縄文時代の遺物を含む包含層や多数の柱穴が検出されている。

以下遺構ごとに説明を加える。

#### (1) 竪穴住居

##### 1号竪穴住居（第10図）

調査区西半のほぼ中央で確認された。規模は2.2m×1.8mと小さく、長方形プランを呈する。深さは約5cm～20cmで、南壁付近でピットが検出されたものの主柱穴は確認できなかった。

カマドは住居西側壁面のほぼ中央付近に張り出した形で付設されていた。カマドには袖石等の痕跡はなく、壁面付近より焼成面がみられた。

この竪穴住居からは土師器の小片が出土したが、図示できるものはなかった。

##### 2号竪穴住居（第10図）

調査区西半の東寄りで確認された。規模は3.2m×3.3mのほぼ正方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは約10cm～40cmで、住居内に数個のピットが確認されたが、主柱穴は確認できなかった。

カマドは西側壁面やや北寄りの位置で確認されたが、住居廃絶時に壊されたためか、カマド壁面等は残っておらず、袖の一部と南側袖石が残存し、北側は袖石掘り方が確認され、そばに袖石と思われる石が残っていた。このカマドは住居壁面の内側に作り付けられており、袖石の間には赤く変色した焼成面が確認された。袖石間の幅は約45cmを測る。

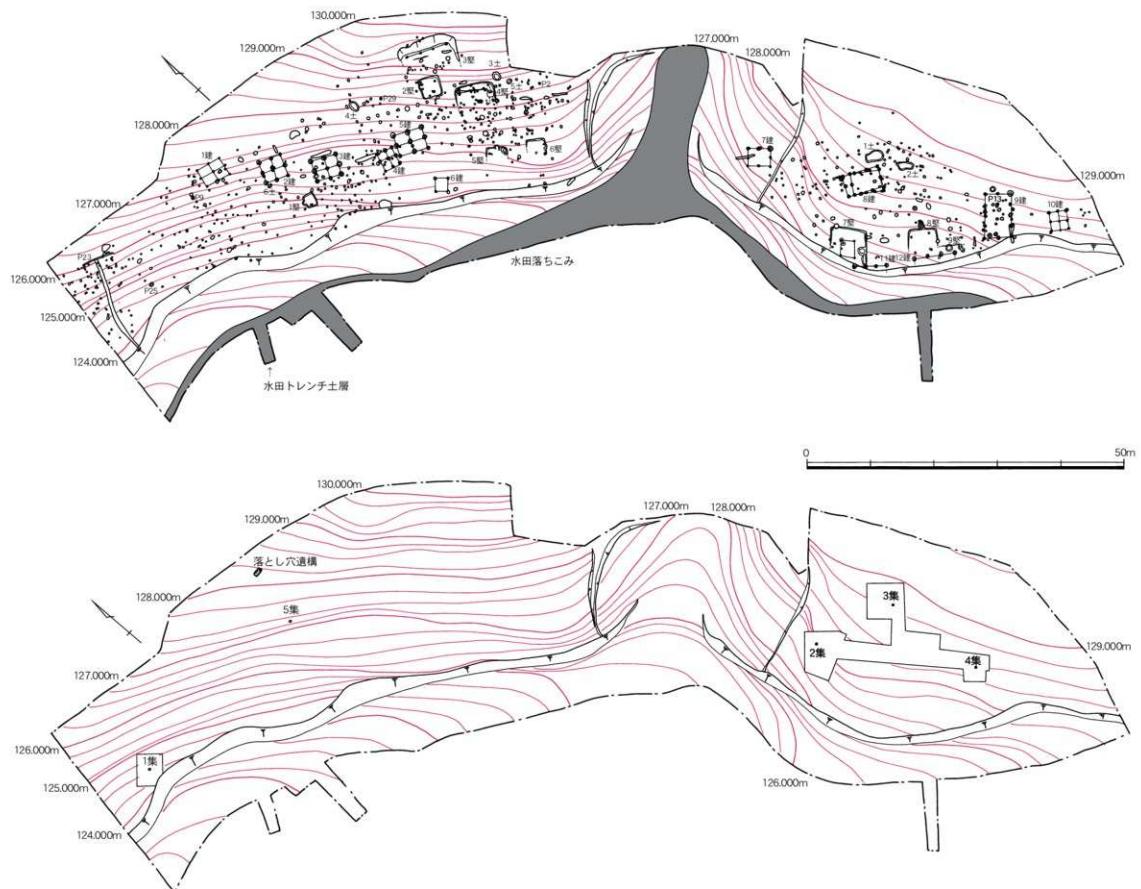
##### 2号竪穴住居出土遺物（第10図）

図示した遺物のうち、8以外はすべて含土中より出土した遺物である。

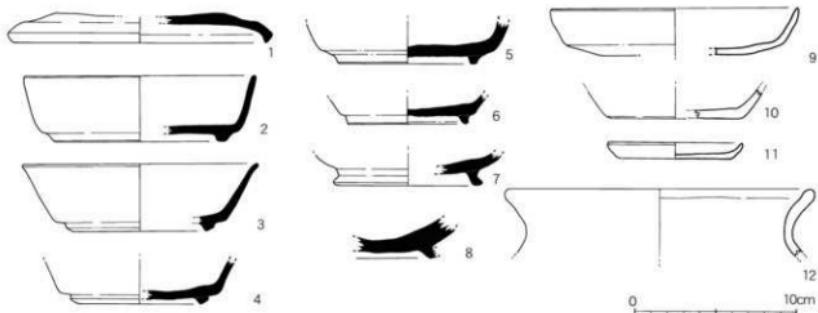
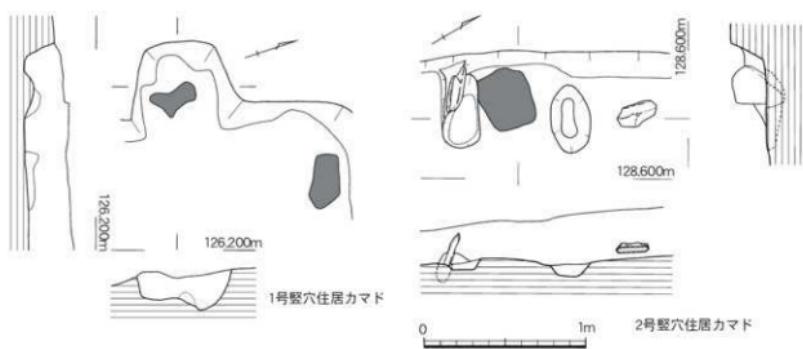
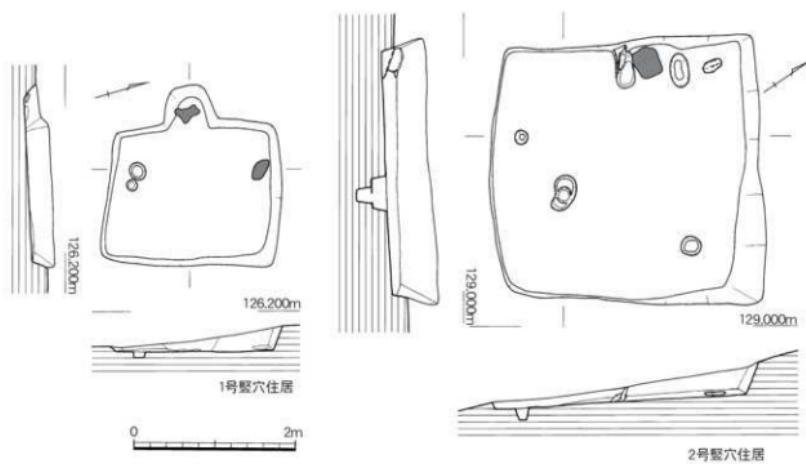
1は須恵器坏蓋である。2～8は須恵器坏である。8はカマドより出土した。9は土師器皿である。10は土師器坏である。11は土師器小皿、12は土師器甕である。

##### 3号竪穴住居（第11図）

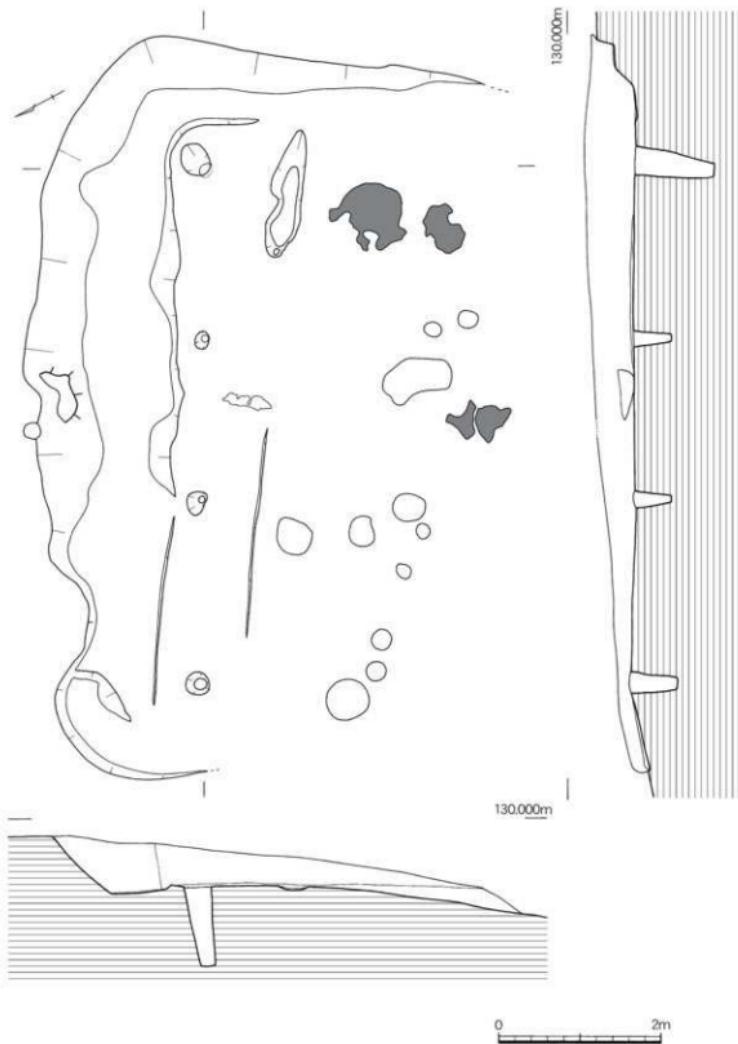
2号竪穴住居の東側で検出された。住居南側は削平されているものの、長方形プランを呈している。住居の規模は9.2m×5.5mを測り、深さは最大約60cmである。床面は概ね平坦であるが、北側壁面沿いには浅い溝が巡る。この溝に沿って南側には主柱穴とみられるピットが1m間隔で4本並んで検出された。主柱穴列の1.8m西側ではカマド焼成面のような焼土が確認されたものの、壁面からはやや離れた位置にあり、袖石の痕跡も確認されなかったことから、カマドとは別の用途も考えられる。この住居は、竪穴住居として説明を行ったが、他の住居と比較すると、主柱穴やカマドの様相が異なっており、別の何らかの施設としてつくられた可能性がある。



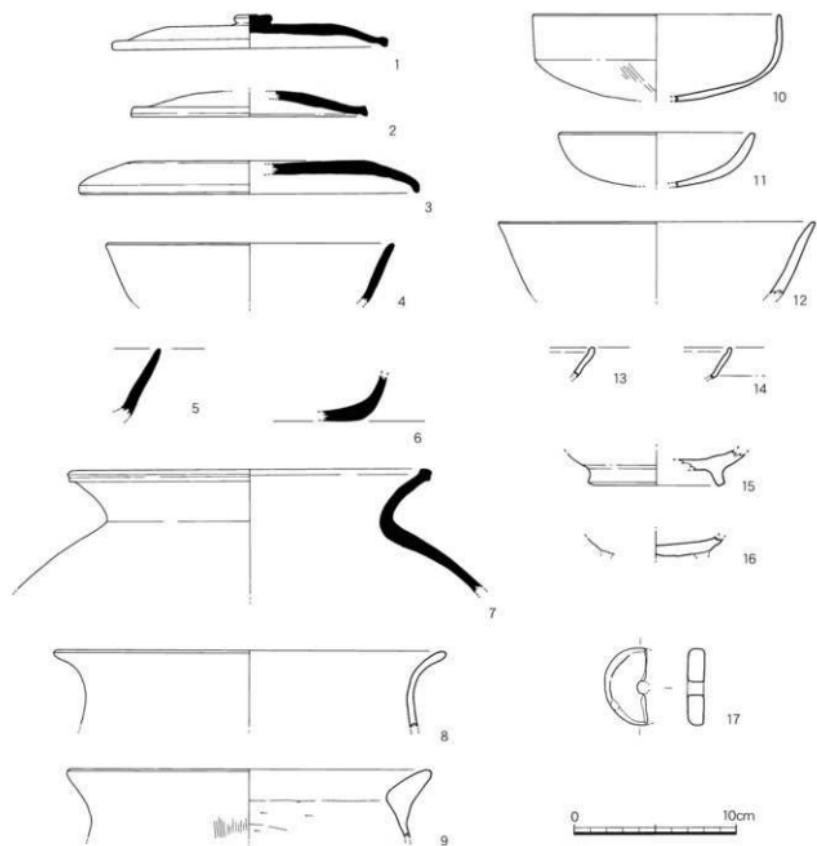
第9図 B地区遺構配置図 (1/400)



第10図 1・2号竪穴住居・同カマドおよび出土遺物実測図 (1/60, 1/30, 1/3)



第11図 3号竖穴住居実測図 (1/60)



第12図 3号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

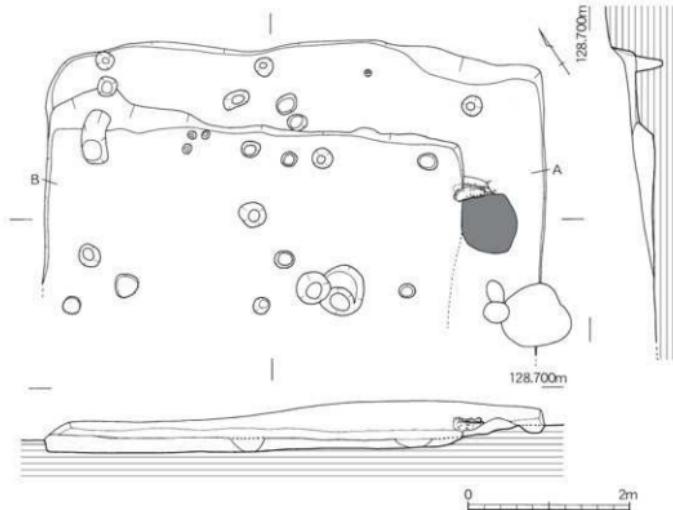
### 3号竪穴住居出土遺物 (第12図)

10は床面直上より出土したが、それ以外の遺物はすべて含土中より出土した。

1～3は須恵器壺蓋である。4～6は須恵器壺である。7は須恵器甕である。8は土師器甕である。主柱穴列の南側で床面より10cmほど浮いて出土した。9は土師器甕である。10は土師器壺である。住居の東隅床面から出土した。11・13・14は土師器皿である。12・15・16は土師器塊である。17は紡錘車（土製品）である。北壁・主柱穴列間で床面より15cmほど浮いて出土した。

### 4号竪穴住居 (第13・14図)

2号竪穴住居の東南で検出された。遺構検出段階では1軒と判断していたが、掘り進めるうちに2基の住居が切り合っていることが確認された。先につくられた住居（A）は確認面では $5.8m \times 3.5m + \alpha$ の規模で、床面までの深さは約30cmを測る。主柱穴ではなく、カマドも確認されなかった。新しい住居（B）は $5.1m \times 2.7m + \alpha$ 、深さ約50cmを測る。主柱穴ではなく、住居の北東コーナーより



第13図 4号(A・B) 穫穴住居実測図(1/60)

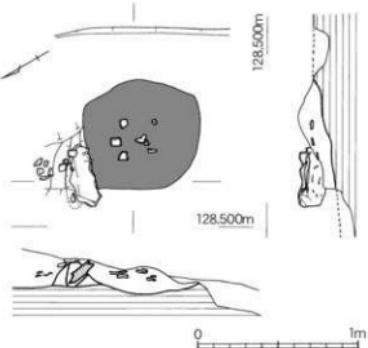
やや東側壁面沿いに外に張り出した形でカマドが確認された。このカマドからは袖石とカマド構築粘土の一部が確認された。焼成面は被熱によりかなり硬化していた。

#### 4号竪穴住居出土遺物 (第15図)

8を除きいずれも住居埋土の上層部分から出土しており、床面直上のものはなかった。1は須恵器壺蓋である。2~5は須恵器壺である。6・7は土師器塊である。8は土師器小皿である。カマドのそばで浮いた状態で出土した。9は青磁碗である。黄色がかった緑色を呈し、全体に粗い貫入が見られる。内面には片切彫による文様がある。10~15は土師器甕である。10は肩部外面の一部に赤彩のような痕跡があるが、磨耗のため詳細は不明である。

#### 5号竪穴住居 (第16図)

4号竪穴住居の南約5mで検出された。南半は大きく削平され平面プランは不明である。住居の規模は3.2m×1.2m+αを測り、深さは最大で20cmを測る。主柱穴は確認できなかった。カマドは北側壁面中央に付設され、壁面より半円形に外に張り出していた。また、カマドの右側には袖石抜取痕が確認された。カマド床面は袖石掘り方付近より奥壁にかけて赤褐色に焼成を受けていた。また住居東側コーナーには屋内土坑が付設され、中からは焼土塊等が出土した。



第14図 4号B竪穴住居カマド実測図(1/30)

#### 5号竪穴住居出土遺物（第16図）

遺物は土坑内より土器片が出土したもの、住居に伴うとみられる遺物は小破片のため図示できなかった。なお流れ込みであるが、時期の異なる遺物で実測可能なものについて図示した。

1は弥生土器の甕と思われる。2は土師器の高坏環部分と思われる。3は土師器の高坏脚部片である。

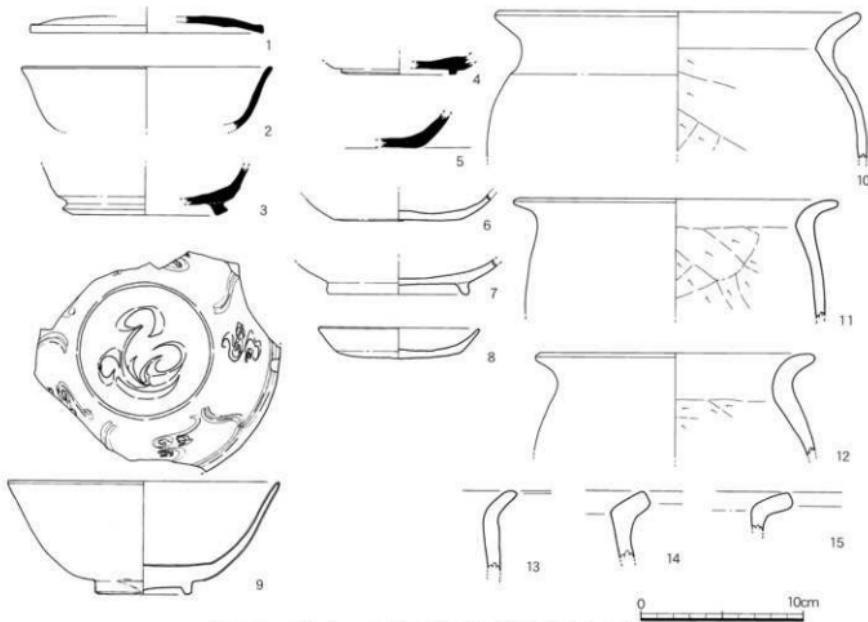
#### 6号竪穴住居（第16図）

5号竪穴住居の東側に隣接して検出された。南半を削平されており、平面プランは不明である。規模は $3\text{m} \times 2\text{m} + \alpha$ を測り、深さは最大で15cm程度である。主柱穴は確認できなかった。カマドは東側壁面中央付近に付設され、壁面よりわずかに外に張り出していた。カマド左側は粘土で構築した袖と袖石が部分的に残っていた。また右側については袖石が残っていた。この袖石の周囲には石が散在しており、いずれかが左側の袖石であった可能性がある。両袖間の幅は約50cmを測る。焚口からカマド奥壁にかけて広範囲に赤褐色に硬化していた。

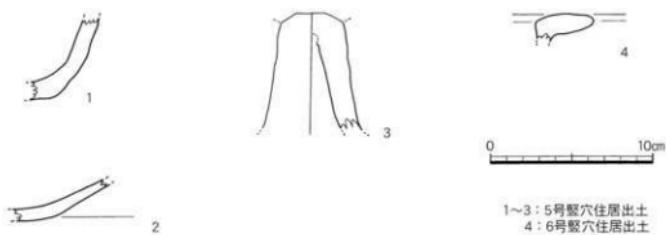
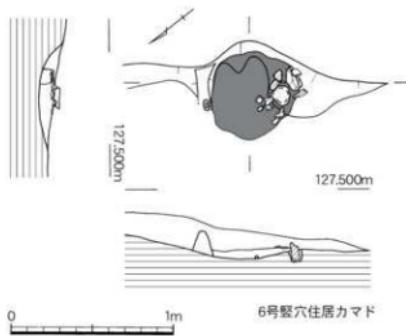
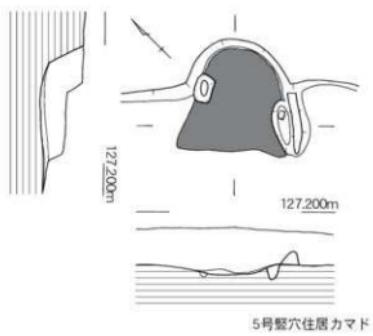
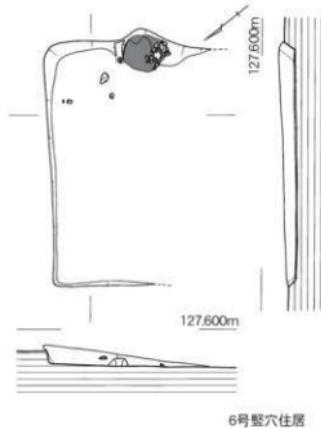
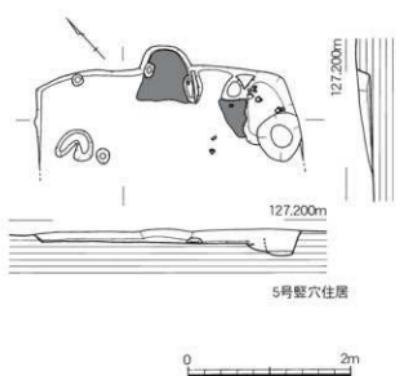
#### 6号竪穴住居出土遺物（第16図）

住居の残りが悪いため遺物の出土は少なく、土師器や須恵器の小破片が出土したにすぎない。

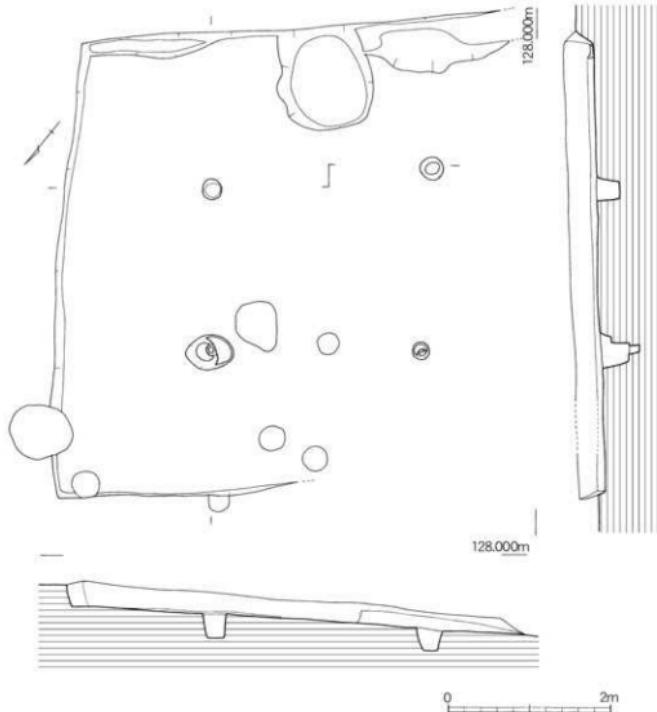
4は土師器の甕口縁部片である。住居の北西隅から浮いた状態で出土した。



第15図 4号（A・B）竪穴住居出土遺物実測図（1/3）



第16図 5・6号竪穴住居・同カマドおよび出土遺物実測図 (1/60, 1/30, 1/3)



第17図 7号竖穴住居実測図 (1/60)

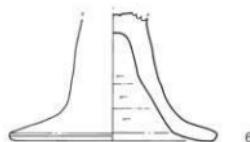
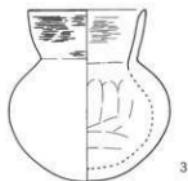
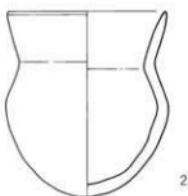
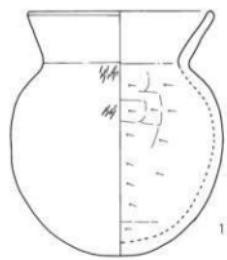
#### 7号竖穴住居 (第17図)

1～6号竖穴住居から小さな谷状の落ち込みを隔て、現水田への落ち際で確認された竖穴住居である。西側を削平されているが、確認面では $5.7m \times 5.2m + \alpha$ を測り、ほぼ正方形プランを呈していたと思われる。深さは最大約25cmを測り、4本の主柱穴が確認された。主柱穴の深さは30～50cm程度である。炉跡は確認されなかったものの、南壁ほぼ中央には南面土坑が確認された。

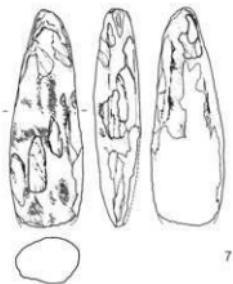
#### 7号竖穴住居出土遺物 (第18図)

住居の残存状況のわりには比較的の遺物が多く、床面直上のものも多く見られた。

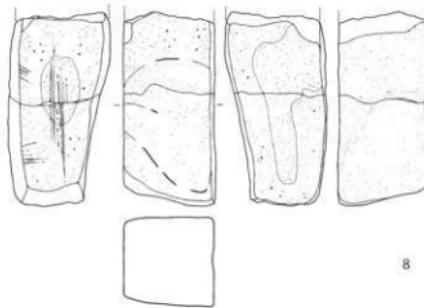
1～3はほぼ完成品で、1・2は小型の甕、3は小型の壺である。1は北隅から床面で出土した。肩部外面に黒斑がある。内面ヘラ削り。2は南面土坑の床面より出土。底部内面に指頭圧痕がある。3は南面土坑より出土。外表面全体と口縁部内面に黒斑がある。内面ヘラ削り。4～6は土師器の高坏である。4は埋土上層より出土の坏部片である。5は南面土坑そば出土の坏部片である。6は埋土上層出土の高坏脚部片である。7は磨製石斧で、床面から出土した。片面刃部を欠き、また一部に敲打痕が残る。片岩製。8は砾石である。5の高坏坏部に重なった状態で出土した。確実に使用したと考えられる面が3ヶ所認められる。1つの面は数条の細線が残り、また1つの面には長さ約8cm、幅約2cmの凹面が残る。安山岩製。



0 10cm

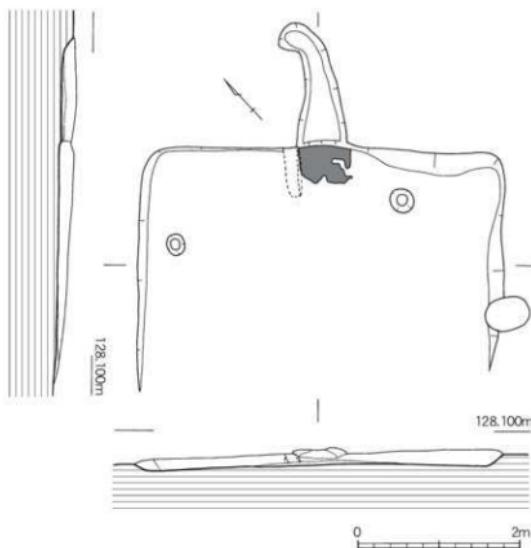


0 10cm



0 10cm

第18図 7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



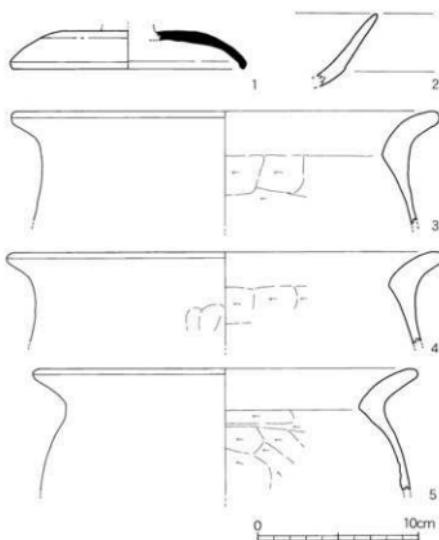
第19図 8号竪穴住居実測図 (1/60)

#### 8号竪穴住居 (第19図)

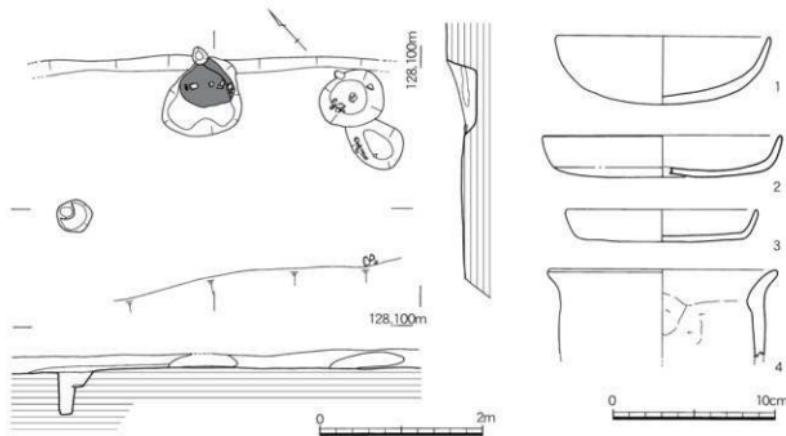
7号竪穴住居の東側で検出された竪穴住居である。上部及び西側を大きく削平されているため平面プランは不明である。規模は $4.5\text{m} \times 3\text{m} + \alpha$ で、深さは最大で約20cmを測る。床面からはいくつかピットが検出されたものの主柱穴と見られるものはなかった。カマドは東側壁面中央に付設されていた。しかし袖石や袖石掘り方は確認されず、カマド壁面等も残っていなかった。カマド奥には長さ約1.5m、深さ約15cmを測る細長い煙道部が確認された。

#### 8号竪穴住居出土遺物 (第20図)

いずれもカマドの周辺から出土した。1は須恵器環蓋である。2は土師器高环口縁部片である。3～5は土師器の叢口縁部片である。



第20図 8号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第21図 9号竖穴住居および出土遺物実測図 (1/60、1/3)

#### 9号竖穴住居 (第21図)

8号竖穴住居の東に位置し、8号竖穴住居に切られる。ほぼ全体を削平されており、検出時はわずかに北側壁面の一部が確認されたにすぎない。北壁の長さは約 $4\text{m} + \alpha$ を測る。深さは最大で約15cmを測る。柱穴は不明である。カマドは北側壁面沿いに付設され、張り出しは見られない。袖石やカマド壁面等の痕跡は確認されず、わずかに浅い掘り込み内に焼成面が残っていた。またカマドの東南1mの位置には深さ直径20~30cm程の土坑が確認され、位置的に屋内土坑と考えられる。

#### 9号竖穴住居出土遺物 (第21図)

1は土師器塊である。内面に煤が付着している。2・3は土師器皿である。4は土師器甕である。

## (2) 挖立柱建物

掘立柱建物は13棟確認され、うち6棟が総柱建物である。調査区内での配置および構成（規模や構造、軸方向等）は、調査区中央部の小さな谷状の落ち込みを挟み東西で様相が大きく異なる。以下、各建物の説明を加える。

### 1号掘立柱建物（第22図）

2間（約3.2m）×2間（約4.2m）の総柱建物。柱間平均は南北約1.7m、東西約2.2m。延床面積は約13.5m<sup>2</sup>、軸方位はN-74°-W。柱穴掘り方10cm～20cm、深さ10cm～20cm。

### 2号掘立柱建物（第22図）

2間（約3.5m）×2間（約3.7m）の総柱建物。柱間平均は南北約1.8m、東西約1.9m。延床面積は約13m<sup>2</sup>、軸方位はN-65°-W。柱穴掘り方は30cm～60cm、深さ40cm～60cm。

### 3号掘立柱建物（第23図）

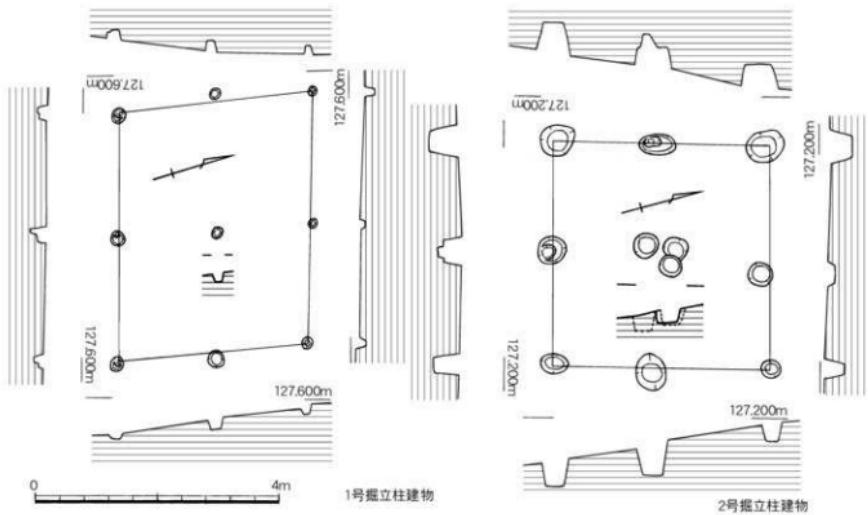
2間（約3.5m）×2間（約4m）の総柱建物。柱間平均は南北約1.7m、東西約2m。延床面積は約14m<sup>2</sup>、軸方位はN-62°-W。柱穴掘り方は40cm～80cm、深さ30cm～70cm。

### 4号掘立柱建物（第23図）

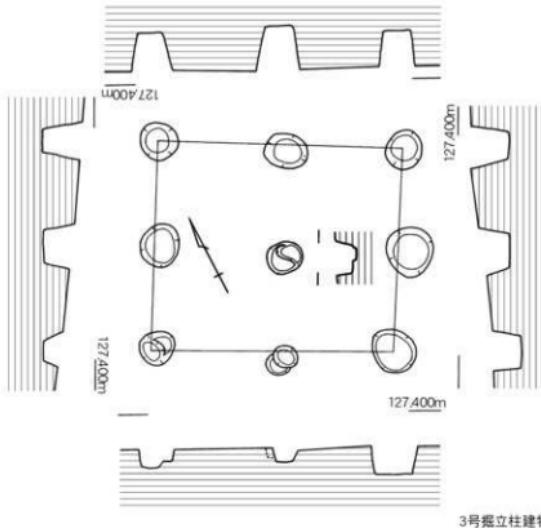
2間（約2.6m）×2間（約3m）の総柱建物。柱間平均は南北約1.5m、東西約1.3m。延床面積は約7.8m<sup>2</sup>、軸方位はN-66°-W。柱穴掘り方は30cm～50cm、深さ10cm～40cm。

### 5号掘立柱建物（第23図）

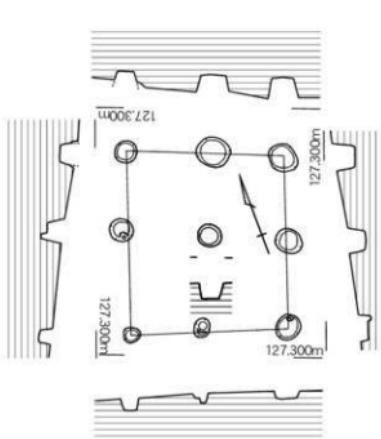
2間（約3.3m）×2間（約4.6m）を測る総柱建物。柱間平均は南北約1.7m、東西約2.3m。延床面積は約15m<sup>2</sup>、軸方位はN-62°-W。柱穴掘り方は50cm～90cm、深さ30cm～90cmと大きく深い。  
P5・P6から遺物が出土し、P6の遺物は土師器小破片である。



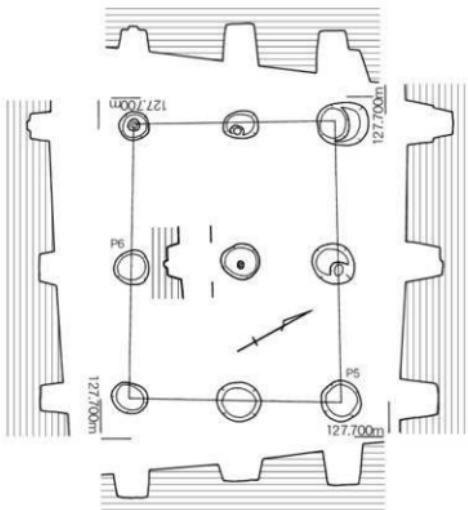
第22図 1・2号掘立柱建物実測図 (1/80)



3号掘立柱建物



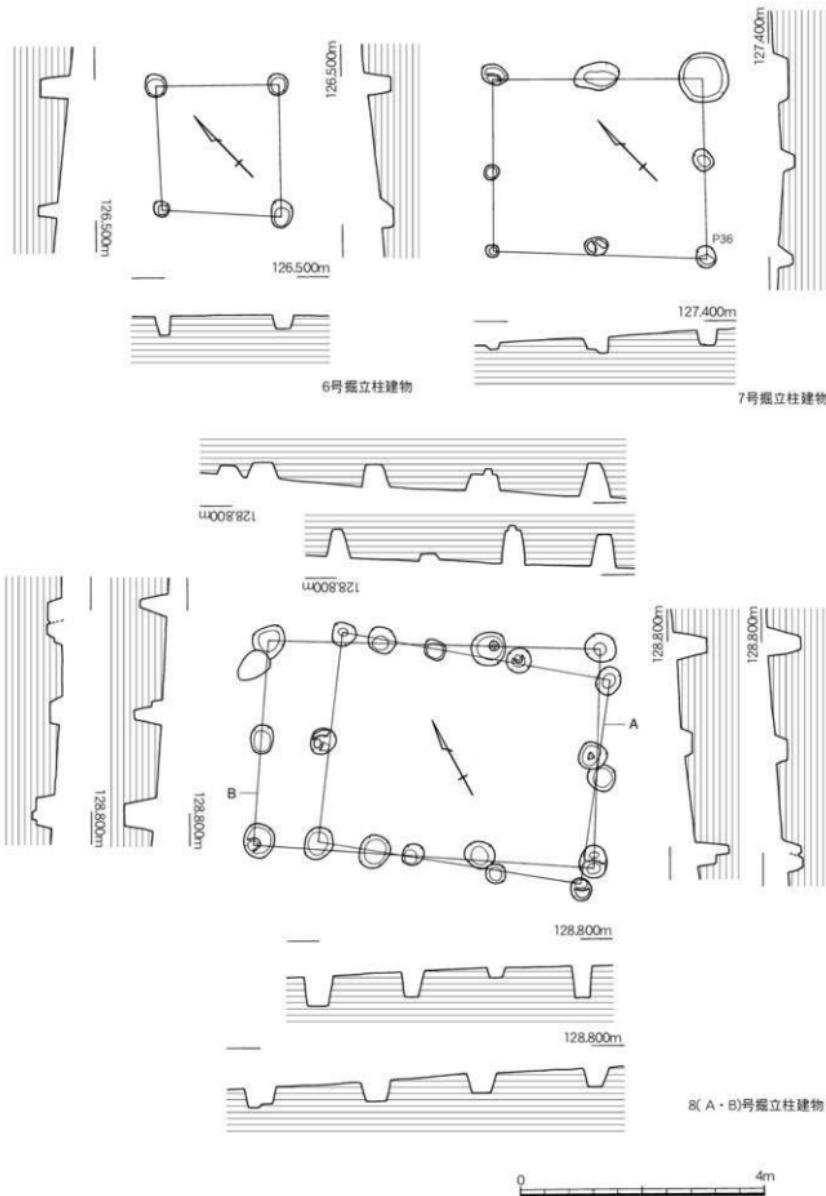
4号掘立柱建物



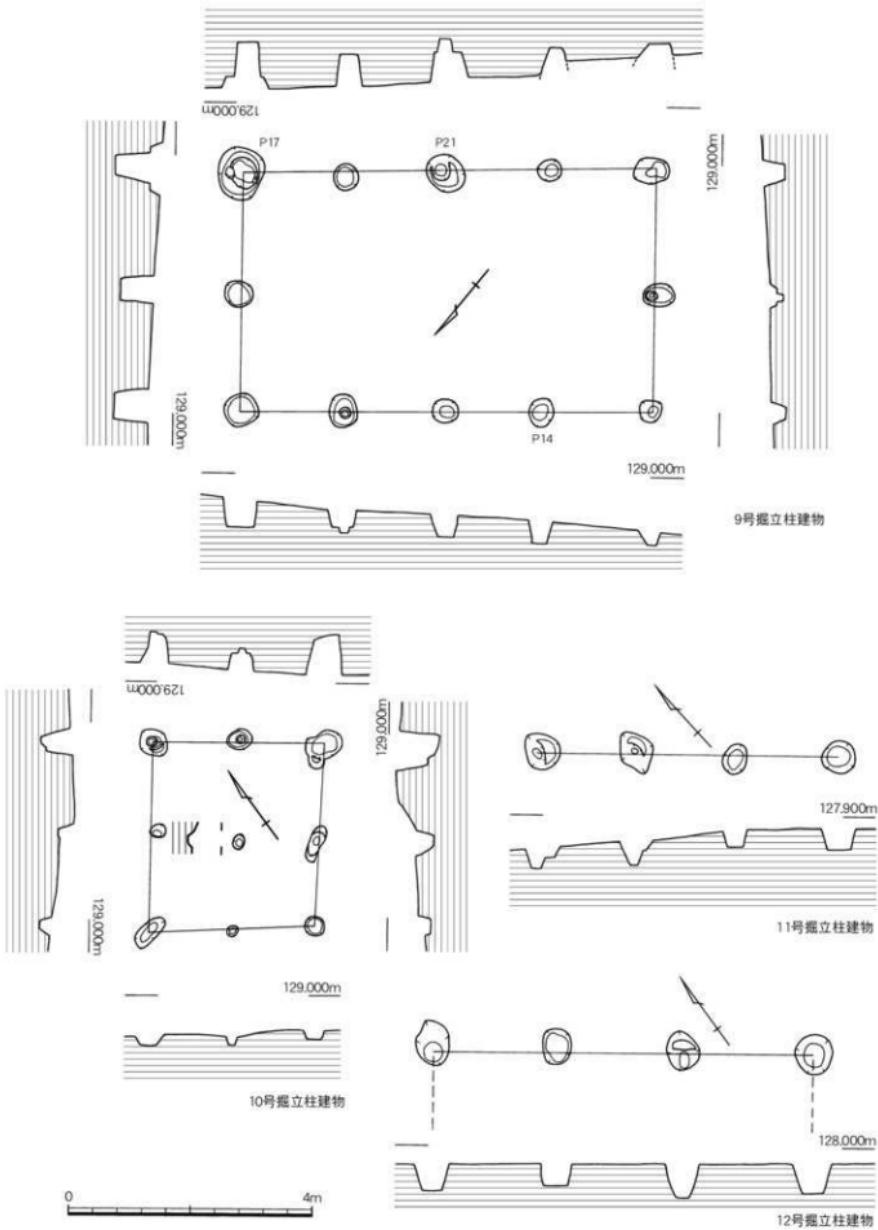
5号掘立柱建物

0 4m

第23図 3・4・5号掘立柱建物実測図 (1/60、1/30、1/3)



第24図 6・7・8(A+B)号掘立柱建物実測図 (1/80)



第25図 9・10・11・12号掘立柱建物実測図 (1/80)

### 5号掘立柱建物出土遺物（第26図）

P5より出土した土師器の甕である。内外面ともに磨耗のため調整は不明である。

### 6号掘立柱建物（第24図）

1間（約2m）×1間（約2m）の建物。延床面積は約4m<sup>2</sup>、柱穴掘り方25cm～40cm、深さ25cm～50cm。軸方位はN-46°-W。規模から考えて削平された竪穴住居の主柱穴のみ残存したものである可能性がある。

### 7号掘立柱建物（第24図）

東側建物群の最も西に位置する。2間（約3m）×2間（約3.4m）の建物。延床面積は約10.2m<sup>2</sup>。柱穴掘り方は25cm～80cmとまちまちであるが、深さは25cm前後と一定している。軸方位はN-43°-W。南隅の柱穴（P36）より土師器の小破片が出土したが小破片であり図示できなかつた。

### 8号掘立柱建物（第24図）

A・Bの2棟が若干軸をずらして切りあっており、Aが古くBが新しい。Aは梁間2間（約3.5m）、桁行3間（約4.4m）。柱間平均は梁間約1.75m、桁行約1.5m。延床面積は約15.4m<sup>2</sup>、軸方位はN-54°-W。柱穴掘り方30cm～50cm、深さ10cm～60cmである。Bは梁間2間（約3.3m）×桁行3間（約5.5m）。柱間平均は梁間約1.7m、桁行約1.8m。延床面積は約18m<sup>2</sup>、軸方位はN-59°-W。柱穴掘り方40cm～50cm、深さ20cm～50cmである。

### 9号掘立柱建物（第25図）

梁間2間（約3.9m）×桁行4間（約7.2m）。柱間平均は梁間約2m、桁行約1.7m。延床面積は約28m<sup>2</sup>。軸方位はN-45°-W。柱穴掘り方35cm～85cm、深さ20cm～80cm。P14・P17・P21の柱穴から土師器・須恵器が出土したが、いずれも小片のため図示不能である。

### 10号掘立柱建物（第25図）

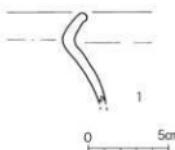
2間（約2.8m）×2間（約3.1m）の総柱建物。柱間平均は南北約1.5m、東西約1.4m。延床面積は約8.7m<sup>2</sup>、軸方位はN-60°-W。柱穴掘り方15cm～50cm、深さ20cm～70cm。

### 11号掘立柱建物（第25図）

7号竪穴住居を切る。東西に連なる4つの柱穴列が確認されたが、建物の南西側は削平され確認できなかった。柱列は3間（約5m）、柱間平均約1.6m。柱列の軸方位はN-48°-W。柱穴掘り方40cm～60cm、深さ30cm～40cm。

### 12号掘立柱建物（第25図）

8・9号竪穴住居を切る。11号建物と同じく、東西方向に連なる4つの柱穴1列のみである。柱列は3間（約6.8m）、柱間平均約2.1m。柱列の軸方位はN-53°-W。柱穴掘り方60cm前後、深さ40cm～60cm。



第26図 5号掘立柱建物出土遺物実測図（1/3）

### (3) 土坑

調査区内では不定形の土坑が数基確認されたが、主として遺物の出土をみた土坑について説明を加える。

#### 1号土坑（第27図）

8号掘立柱建物のそばで検出された。約4.2m×約3mの不定形プランで、深さ約30cmを測る。

#### 2号土坑（第27図）

1号土坑の南隣で検出された。約4.2m×約2.1mの不定形プランで深さ約15cmを測る。

#### 3号土坑（第27図）

4号竪穴住居の東で検出され、約2.1m×約1.8mの楕円形プランで深さ約50cmを測る。

#### 4号土坑（第27図）

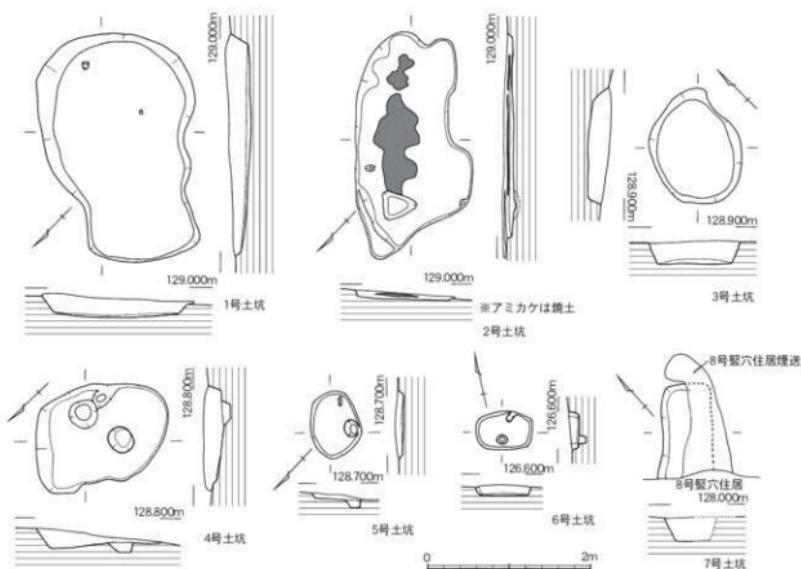
調査区西半ほぼ中央で検出され、西側は削平されている。約2.5m×約2mの不定形プランで深さは最大で約40cmを測る。

#### 5号土坑（第27図）

3号土坑の南そばで検出された。約1.3m×約1mの楕円形プランで、深さ10cmを測る。

#### 6号土坑（第27図）

2号掘立柱建物の南そばで検出された。約1m×約70cmの楕円形プランで、深さ約20cmを測る。土坑内からは土器小片が出土したが、図示不能である。



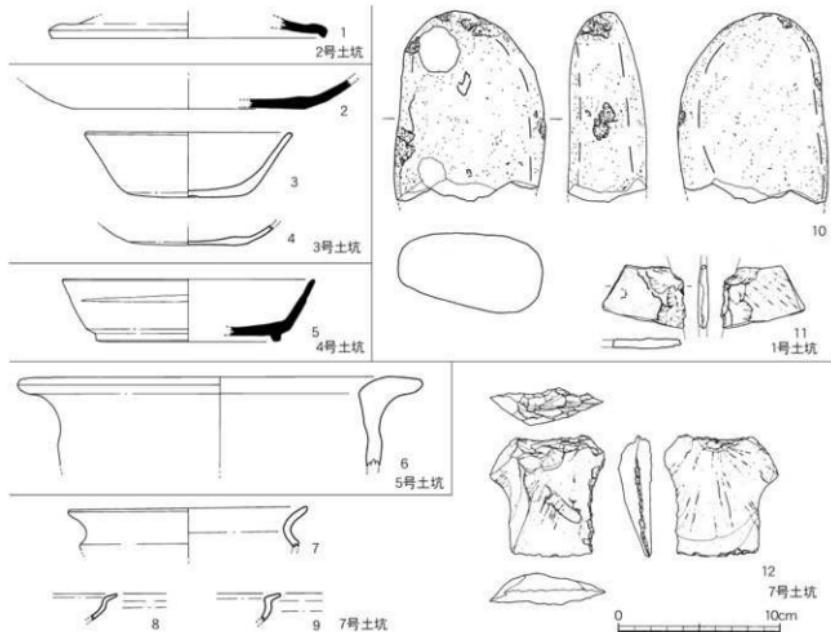
第27図 土坑実測図 (1/40)

### 7号土坑（第27図）

8号竪穴住居の煙道に切られるため正確な規模は不明であるが、 $2.3m + \alpha \times 0.6m + \alpha$  の不定形プランで、深さ約15cmを測る。

### 土坑出土遺物（第28図）

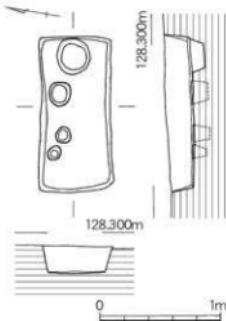
1は2号土坑出土の須恵器坏蓋である。2～4は3号土坑出土。2は須恵器皿、3・4は土師器坏である。4は底部外面にはヘラ切り痕がある。5は4号土坑出土の須恵器坏である。体部外面の一部に沈線上の凹みが見られた。6は5号土坑出土の弥生土器の甕である。7～9は7号土坑出土の縄文土器の浅鉢と思われる。10・11は1号土坑出土石器で、10は磨石・敲石、11は打製石斧の欠損品である。10は表裏面とも使用されており、両面とも摩滅が顕著に認められる。また側辺には敲打痕が残る。安山岩製。11は側辺に丁寧な加工が施されている。安山岩製。12は7号土坑出土石器でスクレイバーと思われる。縦長剥片を素材に、右側辺部に加工痕が残る。安山岩製。



第28図 土坑出土遺物実測図（1/3）

#### (4) 落とし穴遺構（第29図）

調査区西半中央で検出された。検出面での規模は約1m×約45cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは約20cmを測る。底面には4個のピットが確認され、いずれも深度は約10cm程度である。遺構からの遺物の出土はなかった。



#### (5) 集石

竪穴住居や掘立柱建物の遺構検出面に赤化した礫が散在していたことから、さらにこの面を掘下げた結果、集石5基が確認された。

##### 1号集石（第30図）

調査区のはば西端、現水田への落ち際で検出された。

集石の形はほぼ円形に配置されており、範囲は約85cm×約80cmを測る。遺構をつくった際の掘り込みは確認されなかった。構成する礫は10cm程度で、ほとんどの礫が被熱のため赤化している。集石の一番上から打製石斧が出土している。

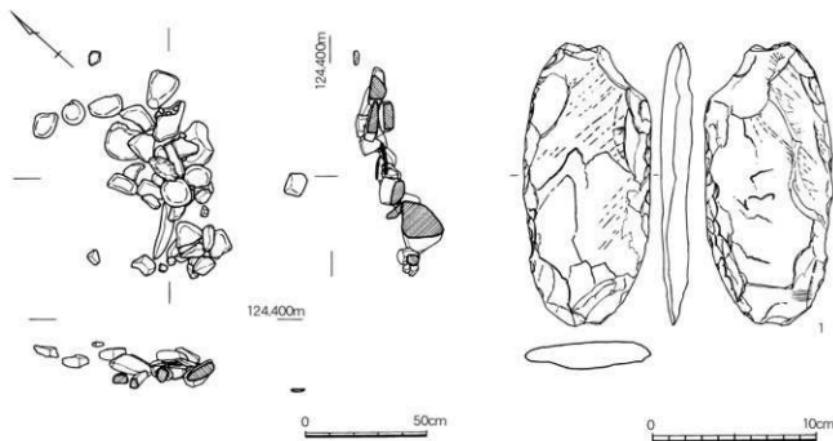
##### 1号集石出土遺物（第30図）

安山岩製の完形の打製石斧である。丁寧な加工が施されている。

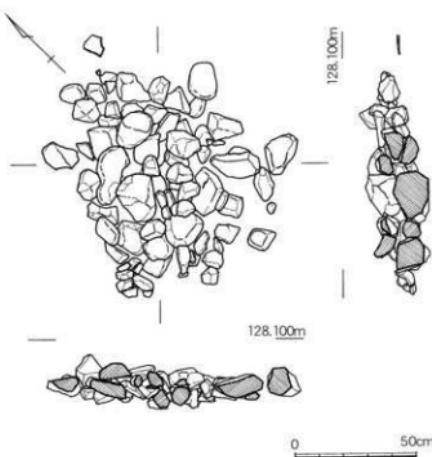
##### 2号集石（第31図）

調査区東半の西寄りで検出された。集石の形はほぼ円形に配置されており、範囲は約1.1m×約95cmを測る。遺構をつくった際の掘り込みは確認されなかった。構成する礫は10cm～20cm程度で、

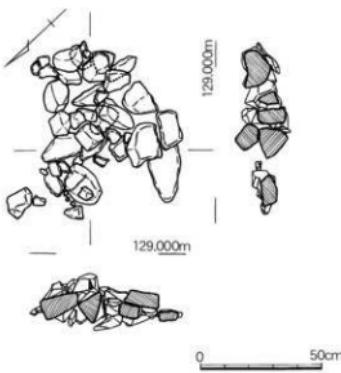
第29図 落とし穴遺構実測図（1/30）



第30図 1号集石および出土遺物実測図（1/20、1/3）



第31図 2号集石実測図 (1/20)



第32図 3号集石実測図 (1/20)

全ての礫が被熱していた。礫に混じって縄文早期とみられる楕円文の押型文土器の破片が出土したが、調査中に紛失した。

#### 3号集石（第32図）

2号集石の東約9mの位置で検出された。集石の形はほぼ円形に配置されており、範囲は約80cm×約80cmを測る。集石の下に掘り込みは確認されなかった。構成する礫は10cm前後であるが、30cmほどの大きな礫もみられ、集石基底部の礫は花弁状に配置されていた。これら全ての礫が被熱していた。この集石からの遺物の出土はなかった。

#### 4号集石（第33図）

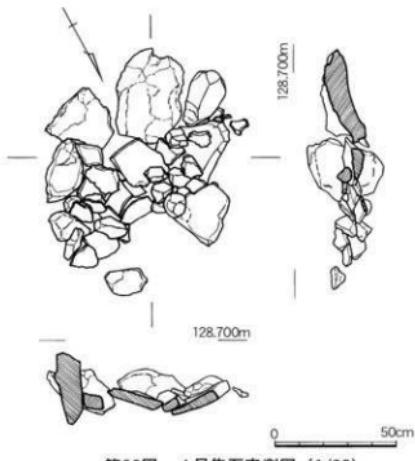
3号集石の南約11mで検出された。集石の形はほぼ円形に配置されており、範囲は約85cm×約90cmを測る。遺構をつくった際の掘り込みは確認されなかった。集石周辺部に位置する礫は花弁状に配置された状態で検出され、基底部を除く全ての礫が被熱していた。この集石からの遺物の出土はなかった。

#### 5号集石（第34図）

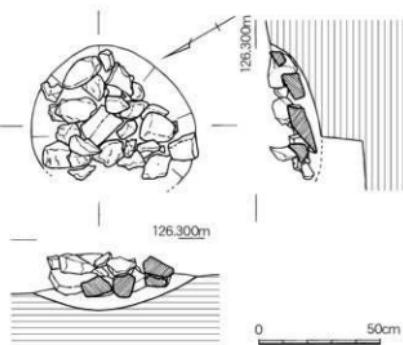
調査区西半中央部、落とし穴遺構の南約6mにある。遺構検出の際に南側を削平してしまったが、本来の集石の形は65cm×約60cm+ $\alpha$ のほぼ円形に配置されていたと推測される。集石の下には浅い皿状の掘り込みが認められた。構成する礫は10cm～20cmで、他の集石に比べて全体的に弱く被熱していた。この集石からは打製石斧が出土した。

#### 5号集石出土遺物（第35図）

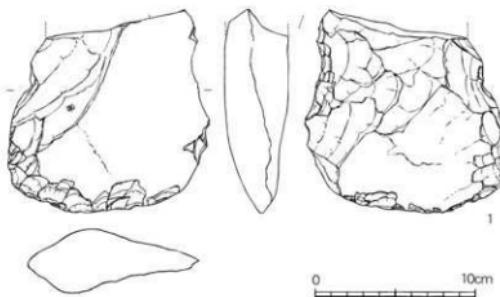
安山岩製の打製石斧である。大型で基部を欠損するものの刃部が残る。片面には自然面が残り、刃部と側面に簡単な加工が施されている。



第33図 4号集石実測図 (1/20)



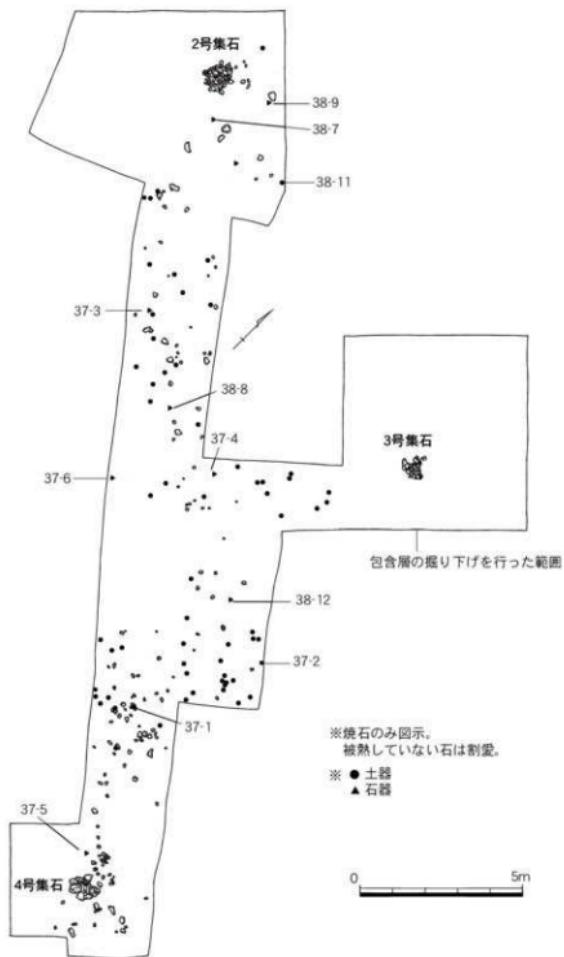
第34図 5号集石実測図 (1/20)



第35図 5号集石出土遺物実測図 (1/3)

(6) 包含層（第36図）

古代の遺構検出面から集石検出面までは暗茶褐色を呈した縄文時代の包含層が見られた。この包含層の掘り下げは2～4号集石の周囲のみの確認に止めたが調査区のほぼ全体にわたって広がっていたと考えられる。図示したものは被熱のため赤化した礫と土器・石器のみであるが、このほかにも熱を受けていない礫が散在していた。被熱礫と非被熱礫の割合はおよそ3：1で、被熱礫は小石



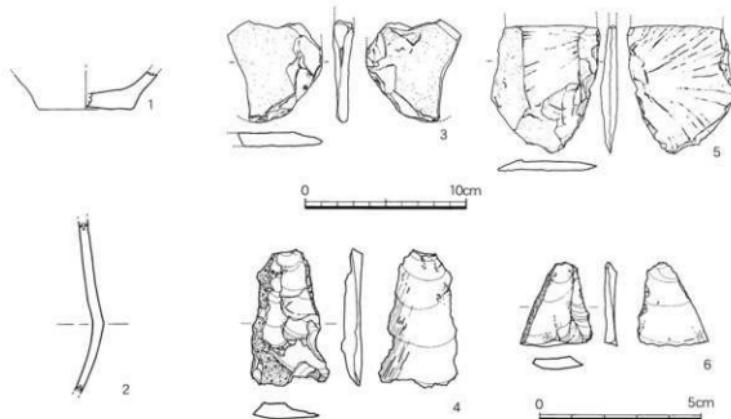
第36図 縄文包含層実測図 (1/150)

から人頭大のものまで見られるのに対し、非被熱礫は小石がほとんどである。非被熱礫は特に集められた様子は見られず、被熱礫の間隙に散在していた。

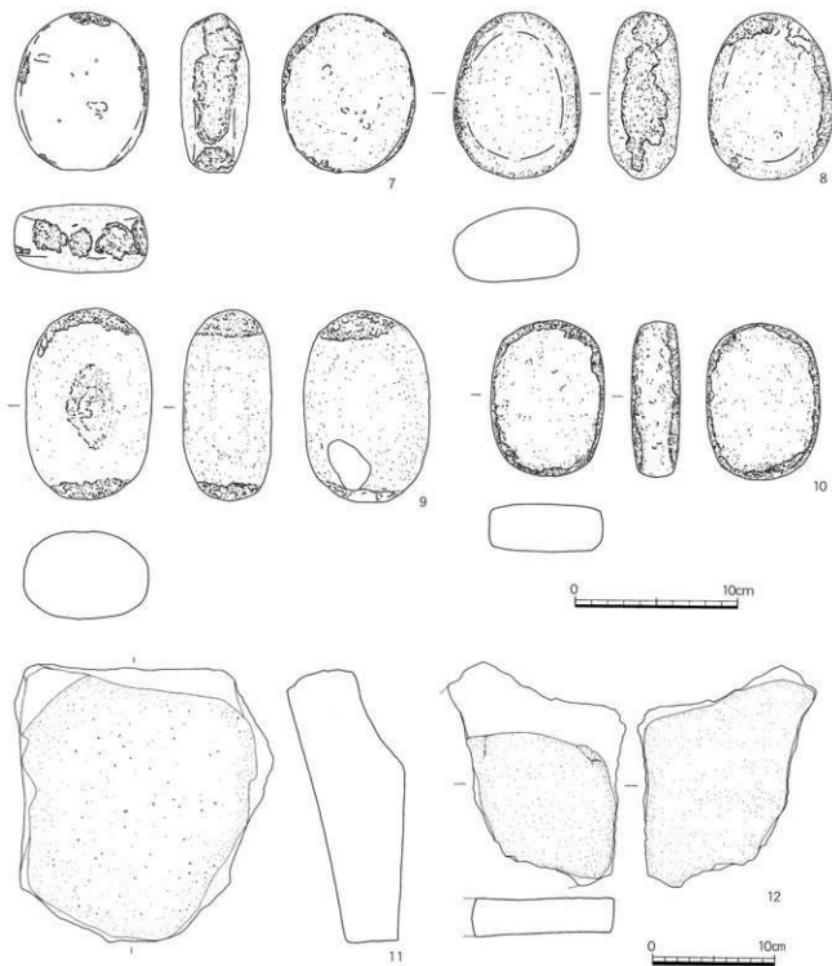
遺物はこれらの礫とともに散在して検出された。土器・石器ともにとくに集中した様子はない。縄文土器は比較的多く見られたが、体部の小破片のため器形も確定できず、図示できたものは少なかつた。全体に脆いうえに磨耗が激しく、調整は観察し難いものばかりであるが、明らかに施文されたものは見られず、ミガキ調整を施した縄文後期～晩期のものがほとんどであろう。石器は打製・磨製とともに見られるが、なかでも磨石・敲石・石皿の比率が高く、特徴的である。

#### 包含層出土遺物（第37・38図）

1は縄文土器深鉢の底部である。ほぼ平滑な底面であるが、わずかに上げ底氣味である。底端部は短いながらも直線的に立ち上がり、それから緩やかに胴部が伸びる。2は縄文土器深鉢の体部である。明瞭な段をつけた屈曲部をはさみ、胴部下半は緩やかなカーブを描いて底部へとつながり、口縁側は内傾しながら直線的に伸びる。3は打製石斧の欠損品である。側辺には丁寧な加工が施されている。安山岩製。4は二次加工剥片である。縦長の剥片を素材に、左側辺部に加工痕が残る。一部自然面を残す。黒曜石製。5は打製石斧であろう。両側辺部に粗い加工が施されている。自然面が残る。安山岩製。6は使用痕剥片である。縦長の剥片を素材に、右側辺部に使用痕跡が認められる。一部自然面が残り、下半部は欠損する。黒曜石製。7～10は磨石である。7・10は表裏面とも全面にわたって使用されており、両面とも摩滅が顕著に認められる。また、側辺部周囲には敲打痕が残る。安山岩製。8は表裏面とも使用されており、摩滅は裏面が顕著に認められる。また、側辺部には敲打痕が残る。安山岩製。9は裏面の一部に摩滅痕が残る。また上・下部には敲打痕が認められる。安山岩製。11・12は石皿である。11は裏面に凹面が認められ、摩滅が顕著である。



第37図 縄文包含層出土遺物実測図1 (1/3, 2/3)



第38図 縄文包含層出土遺物実測図2 (1/3, 1/4)

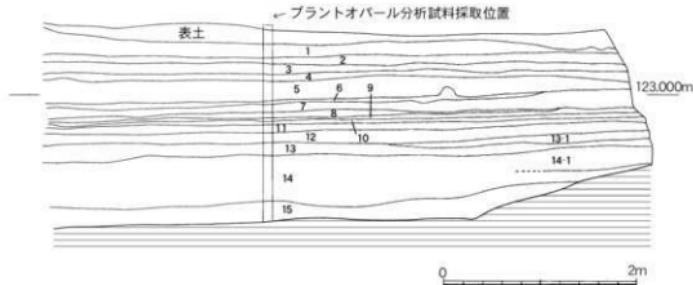
安山岩製。12は裏面に凹面が認められ、摩滅が顯著である。表面のみには加熱を受け赤色化した痕跡が残る。安山岩製。

### (7) 水田（第39図）

竪穴住居や掘立柱建物など居住に関する遺構が検出された丘陵裾部より、谷に下りた水田に設定したトレンチの土層観察により、現水田層を含む数枚の水田（14層まで）と、水田化以前の土層（15層）が確認され、各時代の遺物が出土している。15層に帰属する遺物は不明であるが、最古の水田層と考えられる14層および14-1層において、第40図-5・6・8の青磁・白磁が確認された。

#### 水田トレンチ出土遺物（第40図）

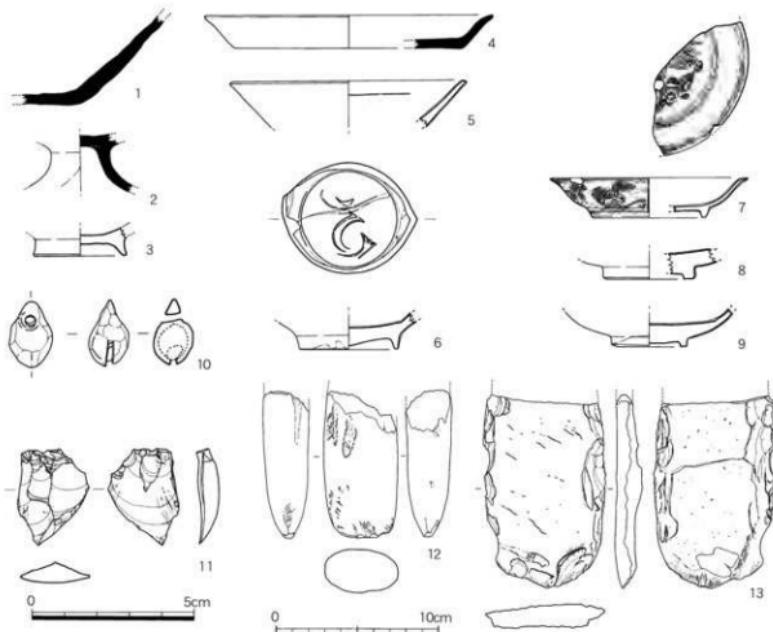
1は須恵器鉢の底部と思われる。底部から明確な稜を作らずに緩やかに体部が立ち上がる。2は須恵器高杯の頸部や脚部である。脚部外面にはシボリ痕がみられる。3は土師器壺の高台付きの底部である。高台と体部の接合部分は明確な稜を作らずにだらかである。高台は短く、外反させながら端部を丸くおさめている。4は須恵器皿である。底部の中央を欠くが平底と思われ、短い口縁がかなり外反しながら立ち上がる。5は青磁碗であろう。体部は直線的に伸び、口縁端部をわずかに外側につまみ出している。口縁下部には片切彫で沈線が入る。6は白磁碗の底部である。高台は短くほぼ直立に作られている。高台端部は釉を掻き取っている。高台内部はケズリ仕上げで釉はかかっていない。碗の内部は片切彫により施文されている。7は染付の皿である。短く作り出した高台か



- 1：灰色土。現水田面。粘性・しまりなし。
- 2：灰色土。1より粘性はあるが強弱。
- 3：灰色土。
- 4：灰色土。鉄分により黄色味を帯びる。
- 5：灰褐色土。
- 6：灰褐色土。
- 7：灰褐色土。
- 8：灰褐色土。
- 9：灰褐色土。
- 10：灰褐色土。
- 11：灰褐色土。
- 12：灰褐色土。
- 13：灰褐色土。鉄分の量が少ない。1~12より粘性が強い。
- 13-1：13より茶色味を帯びた灰褐色土。
- 14：灰褐色土。
- 14-1：14より鉄分が濃く、粘性がある。
- 15：青灰色土。鉄分を含まない。部分的に砂層をかむ。粘性は非常に強い。

※2以下の層で特に注記のない層はすべて鉄分・マンガンの沈殿によりオレンジ色を帯びる。また同色の層については鉄分等の層状の沈殿により分層される。

第39図 水田トレンチ土層図（1/50）



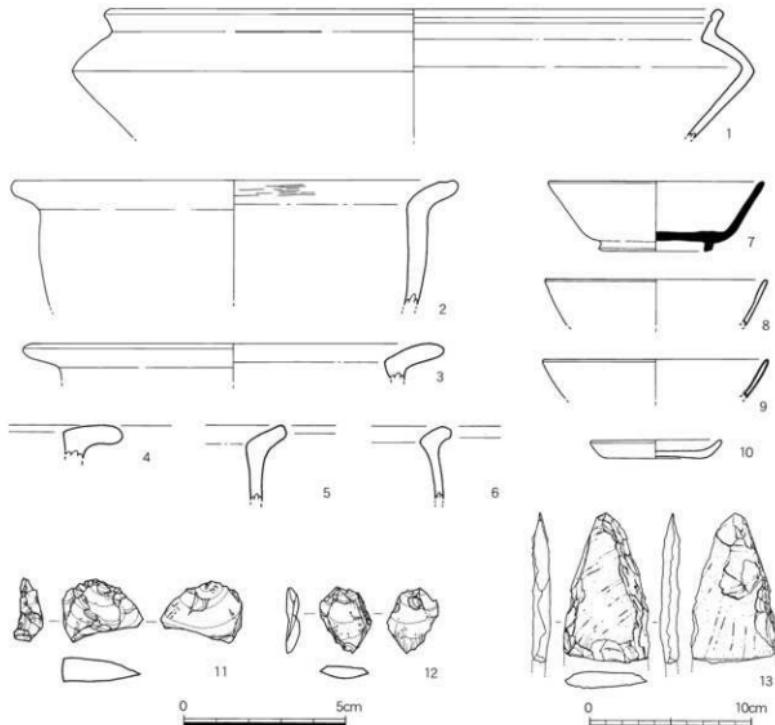
第40図 水田トレント出土遺物実測図 (1/3、2/3)

ら緩やかに体部が立ち上がり、口縁端部は外反する。底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。8・9は青磁碗である。10は土鉢である。胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。外面の調整はユビオサワの後ナデを行っている。11は使用痕剥片である。不定形な剥片を素材に、先端部付近に使用痕跡が認められる。黒曜石製。12は磨製石斧で、基部を欠く。刃部には使用による痕跡と思われる凹凸が見られる。蛇紋岩製。13は打製石斧である。基部を欠損する。ローリングが著しい。安山岩製。

※今回の調査により古代から現代まで続く水田層が確認されたことから、この地域の水田開発史を検討するため、第39図に示すようにプラントオパール分析の基本となる土壤試料を採取し分析を依頼し実施したが、本書ではページの都合上掲載することができなかった。記してお詫び申し上げます。分析結果は本書に続く「ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」の2冊目として刊行予定の「クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡」に掲載予定である。

(8) その他の遺構出土遺物（第41図）

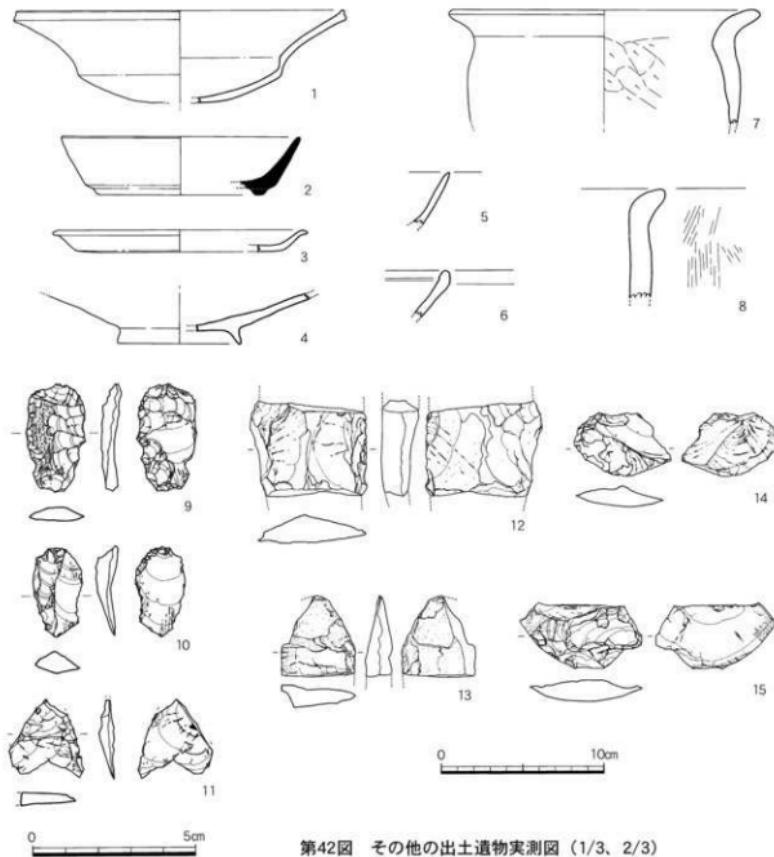
1はP 1から出土した縄文土器の浅鉢と思われる。2はP 40から出土した土師器の甕である。3はP 41から出土した土師器の甕である。4はP 13から出土した弥生土器の甕である。5はP 2から出土した弥生土器の甕である。6はP 29から出土した土師器の甕である。7はP 40から出土した須恵器壺である。8はP 30から出土した土師器壺である。9はP 23から出土した青磁碗である。10はP 1から出土した完形の土師器小皿である。11は4号竪穴住居の埋土中より出土した横長の剥片である。左側辺部に石核時の剥離痕が残る。黒曜石製。12はP 9から出土した二次加工剥片である。縦長の剥片を素材に、右側辺部に加工痕が残る。一部自然面を残す。黒曜石製。13は8号竪穴住居から出土した石器である。上部と下部に加工痕が残る。上部は平坦面と両側辺から加工痕が見られ、下部は一方向からの加工が施されている。打製石斧やスクレイパーとも考えられるが、形態からここでは石鎌として捉えておきたい。安山岩製。



第41図 その他の遺構出土遺物実測図 (1/3, 2/3)

(9) その他の出土遺物 (第42図)

1は土師器高杯の杯部である。2は須恵器杯である。3は土師器皿である。4は土師器盤である。5・6は土師器杯の口縁部である。7・8は土師器裏である。9は自然面の残す剥片を素材に、一侧辺の両面に押圧剥離が施されている。もう一方の縁部にも簡単な二次加工が残る。スクレイバーであろう。黒曜石製。10は使用痕剥片である。縦長の剥片を素材に、右側辺部に使用痕跡が認められる。黒曜石製。11は二次加工剥片である。右側辺部に加工痕が残る。上部を欠損する。黒曜石製。12は打製石斧の欠損品である。粗い加工痕が残る。安山岩製。13は打製石斧の欠損品であろう。側辺に加工痕跡が残る。安山岩製。14は横長の剥片である。ボジ面に自然面を残す。安山岩製。15は使用痕剥片である。横長の剥片を素材に、上部辺に使用の痕跡が認められる。姫島産黒曜石製。



第42図 その他の出土遺物実測図 (1/3, 2/3)

## IV まとめ

### (1) A地区の時期について

1号溝出土遺物のうち1・2は少なくとも8世紀代に出現する須恵器の器種であるが、特に1は器形的特徴から中村編年V型式にあたると考えられ、1号溝の埋没時期は9世紀代と推定される。この1号溝の上層付近より水田層と考えられる包含層が堆積していたが、この包含層中の遺物を見ると、7～9の土師器坏は底部が薄く平坦で、底端部からやや内湾気味に開く特徴をもっている。馬形遺跡1・2号墓からはこの坏と同型式の坏が出土しているが、器形から馬形遺跡出土遺物よりも後出するものと考えられる。さらに13・14の土師器高台付塊は、高くやや外に開く高台をもち、底面は平坦に仕上げ、胴部は高台接合部付近より内湾気味に大きく開きながら立ち上がる特徴から、中島氏の土師器楕I～6類に該当すると考えられ、9世紀後半～10世紀前半頃と推測される。以上より、A地区的遺構は1号溝の使用時期まで含めて考えると、8世紀～10世紀前半頃と考えられる。

### (2) B地区的時期について

#### 縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代の遺構としては落とし穴遺構と集石5基、7号土坑がある。落とし穴遺構は底面にビットを有すること、そしてB地区的南側丘陵上にある有田塚ヶ原遺跡で縄文時代後期と考えられる同様の落とし穴遺構が検出されていることから、縄文時代として差し支えないと考える。ただし細かい時期設定については遺物が出土していないため明らかではない。集石については、その周辺で土器や石器が検出されているが、土器は小片が多くまたほとんどが無文で形のわかるものはなかった。そのような中で2号集石では（紛失のため図示不能であるが）楕円押型文土器が出土しており、近接する3・4号集石も含めて縄文時代早期に営まれた可能性があるが、集石周辺部の包含層からは後期（御領式か）とみられる浅鉢や深鉢も出土していることから時期を特定できず、早期～後期と大きく捉えておきたい。5基ともに構成する礎のほとんどが被熱しており、5号を除き集石下面に掘り込みを持たない。なかでも4号集石は礎が花弁状に並べられ、一部立ったまま残存しており非常に保存状態がよく、食物の調理等に使用されたことがわかる。日田市内での集石の調査例としては、長者原遺跡（早期）、大部遺跡（早期）、上野第1遺跡（早期）、大肥条里下河内地区（前期）、大肥祝原遺跡D区（後期）、があり、縄文時代の遺構が少ない日田市において、集石は比較的多く確認される縄文時代の遺構である。また7号土坑については後期～晩期と考えられる。

#### 古墳時代の遺構と遺物について

古墳時代の遺構として唯一7号竪穴住居（以下7号住）があげられる。この住居内からは高坏や小型の甕・壺などが出土しているが、器形的特徴をみると、高坏は坏部が全体に浅く、また屈曲部には明瞭な稜線が見られない。さらに脚部はあまり高くなく、ややエンタシス状の柱状部を形成する。これらの特徴は布留式の高坏が退化していく流れの中でみられる形態であり、市内では同様の形態を荻鶴遺跡竪穴遺構出土遺物に見ることができる。また同様に2や3の小型甕や壺は荻鶴遺跡竪穴遺構や祭祀遺構出土遺物に類似する。従ってこの住居は荻鶴遺跡とほぼ同時期の5世紀前半代と考えることができる。この時期は市内にカマドが登場する前後の時期であることがすでに指摘されている。7号住の南側で確認された土坑は市内の古墳時代前期にみられる住居の特徴の一つであるが、この時期に通常見られる炉跡は住居中心部で確認されなかった。日田市内で最も古い時期のカマドをもつ住居形態を示す資料としては求来里平島遺跡B区1号住がある。この住居はコーナー付近でカマドが確認されており、5世紀中葉頃の時期設定がされている。本遺跡はこの住居よりも

遺物の形態から考えてわずかに古い要素をもつと考えられることから、7号住は住居形態の移り変わる過渡期の様相を呈していると考えられる。

#### 古代の遺構と遺物について

古代の遺構として竪穴住居9軒（以下〇号住）及び掘立柱建物12棟、土坑6基が確認された。これらの住居は規模がそれぞれ異なり、カマドも壁面内側につくりつけるタイプ（2,8,9号）と半円形に外に張り出すタイプ（1,4,5,6号）がある。さらにカマドの方位は東側に向けるもの（4,6号）、北側に向けるもの（5,8,9号）西側に向けるもの（1,2号）がある。住居からは多くの遺物が出土したので、以下その特徴からうかがえる時期の特定を行うこととする。2号住からはやや分厚い鳥嘴状の口縁部を持ち天井部は比較的平坦な須恵器壺蓋や、低い高台を貼付し底端部から口縁部にかけてほぼ直線的にのびる須恵器壺身のほか、底部中央に向かって深くなる皿などが出土している。3号住からは2号住同様に鳥嘴状の口縁部に宝珠状のつまみをもつものの器高の低い須恵器壺蓋、底部はレンズ状を呈し胴部上位から直口気味に立ち上がる口縁部を持つ土師器壺などが出土している。4号住も3号住同様器高の低い須恵器壺蓋や底部が薄手で底端部から口縁部に向かって大きく緩やかにのびていく土師器壺や高台付塊、小皿、流れ込みと見られる青磁碗などが出土している。8号住は鳥嘴状を呈する口縁部を持ち、器高は高くしっかりしている須恵器壺蓋が出土している。9号住からは2号住同様の形をした土師器皿などが出土している。これらの遺物から、2,8号住出土の須恵器は中村編年IV形式すなわち8世紀中頃～後半と見られ、3,4号住はそれより1段階新しい8世紀後半～末と考えられる。また4号住出土の土師器壺や塊、小皿は山本氏<sup>(II)12</sup>～<sup>(III)13</sup>、中島氏<sup>(II)13</sup>～<sup>(III)14</sup>期に該当し、日田条里上手地区4号土坑出土小皿と同様の器形を呈しており、11世紀後半～12世紀前半頃と推測される。4号住は2軒が切りあい、古い住居（A）を8世紀後半～末、新しい住居（B）を11世紀後半～12世紀前半頃とみた。また、9号住は土師器の器形から2号住と同じ8世紀中頃と推測される。以上を整理するとI期（2,8,9号）、II期（3号,4号A）、III期（4号B）と3時期に分けることができそうである。これは竪穴住居のカマドのタイプと一致しており、ここでは総じて内側にカマドをつくりつけるものが古い要素の一つであると考えられ、出土遺物のなかった1,5,6号住はII期以降の可能性が高い。次に建物は棟持柱のない建物（平地式建物）と総柱建物に分けられるが、平地式建物は切り合うものも含め3棟、総柱の掘立柱建物は、棟持はないが小型で規則的に総柱建物と変わらない7号も含めて7棟（柱列のみの確認された11・12号建物は除く）である。しかしこれら建物の各柱穴からは遺物がほとんど出土せず、時期の特定はできなかった。また土坑は6基確認されたうち、3号土坑からは底部が薄く平坦で底端部から口縁部にかけては大きく開く特徴を持った土師器壺が出土したほか、4号土坑からは須恵器壺身が出土している。これらの遺物は、器形から2号住とほぼ同時期と考えられ8世紀中頃から後半代と推測される。また、トレンチで確認された水田遺構（包含層）出土遺物は、この下層である14層から白磁碗や青磁碗等が出土している。この層から出土した遺物のうち最も新しいと思われる青磁碗は口縁部の傾きなどから底面に花文を描いた中国竈泉窯系青磁碗と考えられ、時期的には山本編年の12世紀後半代と推測される。包含層はこの層以降、水平な堆積状況が続いており、この時期にB地区の水田開発が行なわれていったものと推測される。

#### （3）遺跡の性格について

B地区で確認された竪穴住居と掘立柱建物を見ると、同じ場所への建替えは見られるものほどんど切り合い関係がなく、配置や並びについては調査区中央の谷を挟んで東西でそれぞれ特徴的である。すなわち東側では8号建物と7号建物および9号建物と10号建物のように平地式建物と総

柱建物が互いに軸を同じくして並んでおり、その間に8・9号住が存在する。また西側では1号を除いて谷付近に竪穴住居がまとまって見られるほか、その西側には総柱建物が並んで確認されている。こうしてみると竪穴住居と掘立柱建物は意図的に配置されている様子が窺われ、このことは掘立柱建物群が竪穴住居とはほぼ同時期に存在していたことを示すものである。こうした特徴をもつ遺跡は宇佐市の向野遺跡や大根川<sup>(註16)</sup>遺跡に見ることができる。これらの遺跡では2間×3間、あるいは2間×4間、3間×4間の掘立柱建物に倉庫と考えられる2間×2間の総柱建物が1~2棟の割合で軸を描えて並んでいる例や、2間×2間、2間×3間の総柱建物のみで構成された建物が2棟ずつ並んでいることが報告されている。これらの遺跡については、すぐ南側に古代の官道（勤使道）を踏襲すると考えられている大根川旧道が走っており、その脇には宇佐八幡八箇社の一つである大根川社が今も残っていることから、その街道沿いに大根川社と関係してつくられた古代集落と推測<sup>(註17)</sup>されている。石ヶ迫遺跡の場合は、その立地から宇佐市例のように官道や社寺と直接関係はないと考えられるが、平地式建物と倉庫が対になって並んでいる様子は、集落の中心や端に総柱建物（倉庫）数棟がまとめて見られる古墳時代の多くの集落例と比較すると、この時代にあらわれる特徴的な配置の一つと考えられる。この時代以降、市内の12世紀後半~13世紀の集落が確認された森ノ元<sup>(註18)</sup>遺跡や山口<sup>(註19)</sup>遺跡などの例にその後の様子を見ることができる。また、総柱建物（倉庫）が並ぶ例として尾瀬<sup>(註20)</sup>遺跡4次調査区例がある。この遺跡では古代の道状遺構に並行して整然と並ぶ総柱建物群が確認されている。これらの並んだ総柱建物群の役割については一概に言えないが、いずれにしても何らかの「もの」を納めるための施設であることは間違いないであろう。石ヶ迫遺跡の場合、これらの建物群の可能性として①開発した水田で収穫した穀物用倉庫、②鉄器等の原料あるいは製品の格納庫一石ヶ迫遺跡やこの谷から分かれた小谷にあるクビリ遺跡ではフイゴ羽口や鉄滓が出土しており、近くに鍛冶工房の存在等が推測されるといった機能を考えられる。

## 註

- 1) 中村浩「V 須恵器の変遷」『須恵器』考古学ライブラリー5 ニュー・サイエンス社 1980
- 2) 土居和幸他編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998
- 3) 中島恒次郎「大宰府における楕形窓の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会 1992
- 4) 土居和幸「Ⅱ 長者原遺跡」『日田地区遺跡発掘調査概報Ⅰ』日田市教育委員会 1986
- 5) 田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査2 手嶋遺跡／大部遺跡』大分県教育委員会 1998
- 6) 土居和幸「『手野第一遺跡』『平成8年度(1996年度)』日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 1998
- 7) 行時志郎「大肥条里下河内地区」『平成12年度(2000年度)』日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2001
- 8) 若杉竜太「大肥条里尻原地区」『平成11年度(1999年度)』日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 1999
- 9) 行時志郎編『萩鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995
- 10) 土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2002
- 11) 1に同じ
- 12) 山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1988
- 13) 3に同じ
- 14) 行時志郎編『日田条里上手地区Ⅲ／高瀬条里永平寺地区／尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2001
- 15) 山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年—大宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究No.8』日本貿易陶磁研究 1988
- 16) 渋谷忠章他編『森山遺跡／大根川遺跡』一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報 大分県教育委員会 1988  
渋谷忠章他編『大根川遺跡／向野遺跡』一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報 大分県教育委員会 1990  
後藤晃一編『向野遺跡Ⅱ』一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報 大分県教育委員会 1991
- 17) 清水宗昭「五節 大根川社と周辺の奈良時代遺跡」『宇佐大路一宇佐への道調査—』大分県文化財調査報告第87輯 大分県教育委員会 1992
- 18) 行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998
- 19) 山路康弘他編『山口遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第20集 日田市教育委員会 2000
- 20) 行時志郎編『尾瀬遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001

第2表 出土土器観察表1

神田番号	区名	道 桟	番 号	種 別	形 様	法 量		調 整		胎 土	焼 成	色 調		備 考
						口径	底径	部高	外 面			外 面	内 面	
8 1 A	1溝屈曲	須恵器	塊	(11.8)	-	(4.8)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰色	灰色	外面部は回転ヘラ切り、 クロロ回転：右	
8 2 A	1溝屈曲	須恵器	塊	-	-	(2.6)	回転ヨコナデ	不定方向のナデ	B C	良	灰色	灰色	底面部は回転ヘラケズリ、 クロロ回転：左	
8 3 A	1溝	須恵器	束	(21.7)	-	(4.4)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰色	灰色	外面部に自然粒付着 クロロ回転：不明	
8 4 A	西壁T	須恵器	束？	-	12.5	(9.25)	ケズリ後ナデ	回転ヨコナデ	B C	普通	暗灰色	灰色	外面部に自然粒付着 クロロ回転：左	
8 5 A	西壁T	須恵器	瓶	(12.6)	-	(2.8)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	H	良	灰色	灰色	外面部に自然粒付着 クロロ回転：右	
8 6 A	西壁T	土師器	杯	(15.6)	-	(4.6)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	A B C	普通	浅黄褐色	浅黄褐色	底部外面に溝香状の接合 板あり	
8 7 A	1溝付近	土師器	杯	(12.7)	7.2	3.5	不明	ヨコナデ	H	良	灰白色	灰白色		
8 8 A	1溝付近	土師器	杯	-	(7.0)	(1.95)	ナデ	ナデ	A B C	良	灰褐色	灰褐色	内面部に黒斑あり	
8 9 A	1溝屈曲	土師器	杯	-	(9.0)	(1.65)	ヨコナデ？	不明	D H	良	浅黄褐色	浅黄褐色	底部はヘリ切り後ナデ	
8 10 A	1溝屈曲	土師器	杯	(12.1)	-	(4.2)	ヨコナデナデ	ヨコナデナデ	D G	良	灰褐色	灰褐色	砂粒をほんんど含まない	
8 11 A	1溝	土師器	皿	(18.4)	-	(1.5)	回転ナデナデ	回転ナデナデ	B	良	浅黄褐色	浅黄褐色	胎土はきめ細かい	
8 12 A	1溝屈曲	土師器	瓶	-	(12.1)	(4.8)	ナデ	ナデ	A B C	普通	灰褐色	灰褐色		
8 13 A		3	土師器	塊	-	(8.0)	(2.6)	不明	不明	A B C D	普通	浅黄褐色	浅黄褐色	
8 14 A	1溝付近	土師器	塊	-	(8.9)	(2.8)	ヨコナデナデ	不明	A H	良	灰白色	灰白色		
8 15 A		1	土師器	束	-	-	(7.0)	ナデ	ケズリ？	A B C	良	灰褐色	灰褐色	
8 16 A		1	土師器	甕	-	-	(5.5)	ヨコナデナデ	ケズリ	A B C	良	灰褐色	灰褐色	
10 1 B	2堅	21	須恵器	杯蓋	(16.4)	-	(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	B C	良	暗灰色	暗灰色	クロロ回転外面部：不明、 内面部：右
10 2 B	2堅	一柄	須恵器	杯	(14.4)	(10.7)	(4.05)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：不明、 底面部はヘリ切り後ナデ
10 3 B	2堅	一柄	須恵器	杯	(14.6)	(9.1)	(4.15)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	H	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：右？
10 4 B	2堅	一柄	須恵器	杯	-	(8.5)	(2.7)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：不明、 底面部はヘリ切り後ナデ
10 5 B	2堅	一柄	須恵器	杯	-	(8.6)	(2.6)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：不明、 底面部はヘリ切り後ナデ
10 6 B	2堅	一柄	須恵器	杯	-	(7.4)	(1.75)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：左、 底面部はヘリ切り後ナデ
10 7 B	2堅	一柄	須恵器	杯	-	(9.2)	(2.0)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：不明
10 8 B	2堅	カマド一柄	須恵器	杯	-	-	(2.4)	回転ヨコナデ	ナデ	B C	良	暗灰色	暗灰色	クロロ回転：左
10 9 B	2堅	一柄	土師器	皿	(15.4)	-	(2.9)	不明	不明	B D	普通	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：左
10 10 B	2堅	一柄	土師器	杯	-	(8.6)	(1.95)	ヨコナデ？	不明	D	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：左
10 11 B	2堅	一柄	土師器	皿	(8.4)	(6.8)	1.0	不明	不明	D	良	浅黄褐色	浅黄褐色	底面部に板状疣瘤あり
10 12 B	2堅	一柄	土師器	束	(19.2)	-	(4.1)	不明	不明	B D	普通	浅黄褐色	浅黄褐色	
12 1 B	3堅	34	須恵器	蓋	(17.0)	-	2.1	ヘラケズリ、 回転ヨコナデ	ナデ	B C	良	灰白色～灰褐色	灰褐色	つまみ紐：2.25、 クロロ回転：右
12 2 B	3堅	36	須恵器	蓋	(14.6)	-	(1.5)	ヘラケズリ、 回転ヨコナデ	ナデ	B C	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：右
12 3 B	3堅	57	須恵器	蓋	(21.0)	-	2.0	ヘラケズリ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	不良	灰白色～灰褐色	灰白色～灰褐色	クロロ回転：不明
12 4 B	3堅	52	須恵器	杯	(17.8)	-	(3.65)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B	良	灰白色	灰白色	クロロ回転：右
12 5 B	3堅	一柄	須恵器	杯	-	-	(4.2)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	H	良	灰褐色	灰褐色	クロロ回転：不明
12 6 B	3堅	一柄	須恵器	杯	-	-	(2.8)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	普通	灰白色	灰白色	クロロ回転：不明
12 7 B	3堅	41	須恵器	蓋	(22.4)	-	(7.7)	タタキ後ナデ	タタキ後ナデ	B C	良	灰褐色～暗灰色	暗灰色～暗灰色	クロロ回転：右？
12 8 B	3堅	2	土師器	瓶	(24.2)	-	(4.75)	不明	不明	D	普通	黄褐色	黄褐色	
12 9 B	3堅	7	土師器	甕	(22.4)	-	(4.2)	ヨコナデハケメ	ヘラケズリ	B C	良	明赤褐色	明赤褐色	
12 10 B	3堅	47	土師器	杯	15.4	-	5.4	不明	ヨコナデ	A G	良	橙色	橙色	
12 11 B	3堅	38	土師器	皿	(12.2)	-	(3.35)	不明	不明	G H	普通	明黄褐色～橙色	明黄褐色	
12 12 B	3堅	20	土師器	塊	(19.6)	-	(4.5)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	浅黄褐色	浅黄褐色	

第3表 出土土器觀察表2

神田番号	区名	道 構	番 号	種 別	形 様	法 量		調 整			胎 土	燒 成	色 調		備 考	
						口径	底径	部高	外 面	内 面			外 面	内 面		
12	13	B	3堅	31	土師器	皿	-	-	(1.9)	不明	不明	E	良	褐色	褐色	
12	14	B	3堅	5	土師器	皿	-	-	(1.95)	不明	不明	ABD	良	褐色	褐色	
12	15	B	3堅	一括	土師器	壺	-	(8.4)	(2.2)	ヨコナデ	ナデ	BC	良	に赤褐色	に赤褐色	
12	16	B	3堅	23	土師器	壺	-	-	(1.25)	回転ヨコナデ	ナデ	BC	良	褐色～明赤褐色	褐色～明赤褐色	
15	1	B	4堅	一括	須恵器	蓋	(14.4)	-	(1.0)	ケズリ復ヨコナデ	ナデ	H	良	灰色	灰色	
15	2	B	4堅	13	須恵器	杯	(15.4)	-	(0.9)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	BC	良	灰色	灰色	ロクロ回転：左？
15	3	B	4堅	一括	須恵器	杯	(10.1)	-	(0.8)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	BC	良	灰色	灰色	ロクロ回転：不明
15	4	B	4堅	一括	須恵器	杯	(7.1)	-	(1.15)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	BC	良	灰色	灰色	ロクロ回転：不明
15	5	B	4堅	一括	須恵器	杯	-	-	(2.0)	不明	不明	BC	不良	灰白色	灰白色	ロクロ回転：不明
15	6	B	4堅	26	土師器	壺	(7.8)	-	(1.05)	不明	不明	B	普通	褐色	褐色	
15	7	B	4堅	1	土師器	壺	-	(8.8)	(2.15)	ヨコナデ？	ヨコナデ？	ABCD	良	浅黄褐色	浅黄褐色	
15	8	B	4堅	カマド1	土師器	小皿	(0.9)	7.8	(1.6)	不明	不明	AH	良	浅黄褐色	浅黄褐色	
15	9	B	4堅	19	青磁	碗	(16.7)	6.0	7.0				良	に緑黄色	に緑黄色	無い貫入。片切斷により施文
15	10	B	4堅	12	土師器	甕	(22.6)	-	(9.0)	ナデ	ヘラケズリ	ABCDG	良	褐色	褐色	一部に赤彩？
15	11	B	4堅	15	土師器	甕	(20.0)	-	(7.3)	ナデ	ヘラケズリ	ABCD	良	浅黄褐色	浅黄褐色	
15	12	B	4堅	22	土師器	甕	(17.2)	-	(6.3)	ナデ	ヘラケズリ	ABCD	良	浅黄褐色	浅黄褐色	
15	13	B	4堅	IV層	土師器	甕	-	-	(5.0)	ナデ	ナデ	ABC	良	褐色	褐色	
15	14	B	4堅	8	土師器	甕	-	-	(4.2)	不明	不明	ABC	普通	明赤褐色	明赤褐色	
15	15	B	4堅	7	土師器	甕	-	-	(2.45)	不明	不明	ABC	普通	褐色	褐色	
16	1	B	5堅	1	弥生土器	鉢？	-	-	(5.0)	ナデ	ナデ	BC	良	褐色	褐色	
16	2	B	5堅	一括	土師器	高坏？	-	-	(2.5)	不明	不明	ABCD	普通	褐色	褐色	
16	3	B	5堅	3	土師器	高坏	-	-	(7.2)	不明	不明	ABCDE	普通	浅黄褐色	浅黄褐色	
16	4	B	6堅	立右村近	土師器	甕	-	-	(1.7)	ヨコナデ	ケズリ？	ABCD	良	褐色	褐色	
18	1	B	7堅	1	土師器	甕	11.45	-	15.1	不明	ケズリ	ABCD	普通	に赤褐色	に赤褐色	
18	2	B	7堅	8	土師器	甕	(0.8)	-	(11.45)	ナデ？	ナデ？	BC	普通	明黄褐色	明黄褐色	
18	3	B	7堅	13	土師器	壺	(7.2)	-	10.55	ナデ	ナデ	ABCD	普通	褐色	褐色	
18	4	B	7堅	上層一括	土師器	高坏	(21.85)	-	(5.0)	ナデ？	ナデ？	ABC	普通	褐色	褐色	
18	5	B	7堅	15	土師器	高坏	(16.5)	-	(4.6)	不明	ハケス後ナデ	ABC	普通	明黄褐色	明黄褐色	
18	6	B	7堅	6	土師器	高坏	-	12.8	(7.9)	不明	ケズリ	ABC	普通	明黄褐色	明黄褐色	
20	1	B	8堅	3	須恵器	蓋	(14.8)	-	(2.35)	ヘラケズリ・ 回転ヨコナデ	ナデ	H	良	灰色	灰色	ロクロ回転：右。 底面はヘラケズリ
20	2	B	8堅	一括	土師器	高坏	-	-	(4.5)	不明	不明	ABCD	良	褐色	褐色	
20	3	B	8堅	3	土師器	甕	(26.6)	-	(7.2)	ヨコナデ？ 指端止痕？	ヘラケズリ	ABCD	良	褐色	褐色	
20	4	B	8堅	3	土師器	甕	(27.2)	-	(5.8)	ヨコナデ？ 指端止痕？	ヘラケズリ	ABCD	良	褐色	褐色	
20	5	B	8堅	7	土師器	甕	(24.0)	-	(7.6)	不明	ヘラケズリ	ABCD	良	褐色	褐色	
21	1	B	9堅	22	土師器	壺	(13.3)	-	4.2	不明	不明	DH	良	黄褐色	黄褐色	内面の一部に様付着
21	2	B	9堅	17	土師器	皿	(14.8)	-	2.6	不明	不明	DG	良	褐色	褐色	
21	3	B	9堅	17	土師器	皿	(11.9)	(10.6)	2.0	不明	不明	G	普通	褐色	褐色	
21	4	B	9堅	20	土師器	甕	(14.2)	-	(5.4)	不明	ヘラケズリ	ABCD	良	褐色	に赤褐色	
26	1	B	P%5	一括	土師器	甕	-	-	(5.7)	不明	不明	D	普通	浅黄褐色	浅黄褐色	
28	1	B	2土坑	一括	須恵器	蓋	(17.2)	-	(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	H	普通	灰褐色	灰褐色	ロクロ回転：不明

第4表 出土土器観察表3

神田番号	区名	道 構	番 号	種 別	層 槽	法 量		調 整			胎 土	焼成	色 調		備 考
						口径	底径	部高	外 面	内 面			外 面	内 面	
20 2 B	3 土坑	一括	須恵器	皿	(14.5)	—	(1.85)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	H	普通	灰黄色	灰黄色	ロクロ回転: 不明	
20 3 B	3 土坑	1	土師器	环	(12.8)	7.7	4.0	不明	不明	AH	良	褐色	褐色		
20 4 B	3 土坑	3	土師器	环	(7.4)	—	(1.2)	ヨコナデ?	不明	B C G	良	明黄褐色～褐色	明黄褐色～褐色	底部にへラ切り痕あり	
20 5 B	4 土坑	9	須恵器	环	(15.6)	(11.4)	3.85	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰色	灰色	ロクロ回転: 不明 底端はヘラ切り後ナデ	
20 6 B	5 土坑	1	須生土器	甕	(23.0)	—	(5.45)	ヨコナデ	ケズリ後ナデ?	B C D	良	褐色	褐色		
20 7 B	7 土坑	1	縄文土器	浅鉢	(14.8)	—	(2.55)	ヨコナデ	ナデ?	A B C G	普通	灰褐色～黒褐色	灰褐色～黒褐色		
20 8 B	7 土坑	1	縄文土器	浅鉢	—	—	(1.65)	不明	不明	A B C	普通	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
20 9 B	7 土坑	1	縄文土器	浅鉢	—	—	(2.05)	不明	不明	A B C	普通	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
37 1 B	包含層	4	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	(2.4)	ナデ?	ナデ?	B C D G	普通	明黄褐色～褐色	灰褐色		
37 2 B	包含層	10	縄文土器	深鉢	—	—	(1.88)	不明	ミガキ?	A B C	普通	茶褐色	茶褐色		
40 1 B	水田T	一括	須恵器	鉢?	—	—	(5.7)	ヨコナデ後ナデ	ナデ?	H	良	灰色	灰色	ロクロ回転: 不明	
40 2 B	水田T	一括	須恵器	高环	—	—	(0.5)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	H	良	灰色～緑灰色	灰色～緑灰色	ロクロ回転: 不明	
40 3 B	水田T	一括	土師器	环	—	(5.0)	(1.7)	ヨコナデ	不明	D G H	良	にぶい黄褐色	灰白色		
40 4 B	水田T	一括	須恵器	皿	(17.8)	(14.1)	2.05	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰白色～灰色	灰白色～灰色	ロクロ回転: 右	
40 5 B	水田T	14層	青磁?	碗	(14.6)	—	(2.9)				良	深緑灰色	淡緑灰色	貫入あり、口縁下部内面に片切跡の痕あり	
40 6 B	水田T	14層	白磁	碗	—	(6.1)	(2.25)				良	白灰色	白灰色	内面見込みに片切跡の痕あり	
40 7 B	水田T	一括	染付	皿	(12.4)	(7.0)	2.5				良	藍白色	藍白色	全面に施文、底部に重ね焼き痕あり	
40 8 B	水田T	14層	青磁	碗	—	(5.7)	(1.85)				良	灰緑黄色	灰緑黄色	内面見込みに片切跡の痕あり	
40 9 B	水田T	一括	青磁	碗	—	4.7	(2.35)				良	灰緑黄色	灰緑黄色	貫入あり	
41 1 B	Pt25	1	縄文土器	浅鉢	(38.2)	—	(7.9)	不明	不明	A B C D	普通	褐色～深褐色	褐色～深褐色	口縁部内面に凹窓あり	
41 2 B	Pt40	2	土師器	甕	(27.6)	—	(7.7)	ナデ?	ナデ?	A B C	良	明褐色	明褐色		
41 3 B	Pt41	一括	土師器	甕	(26.0)	—	(2.3)	ヨコナデ?	不明	A B C D	良	褐色	褐色		
41 4 B	Pt13	一括	須生土器	甕	—	—	(2.05)	ヨコナデ	ケズリ?	A B C D	良	明赤褐色	明赤褐色		
41 5 B	Pt2	一括	須生土器	甕	—	—	(4.7)	不明	不明	A B C	普通	にぶい褐色	にぶい褐色		
41 6 B	Pt29	1	土師器	甕	—	—	(4.5)	不明	不明	A B C	普通	褐色	褐色		
41 7 B	Pt40	1	須恵器	环	(13.4)	7.05	4.3	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	B C	良	灰色	灰色	ロクロ回転: 右、 底端はヘラ切り後ナデ	
41 8 B	Pt30	1	土師器	塊	(13.8)	—	(2.85)	不明	不明	A B C D	良	にぶい褐色	にぶい褐色		
41 9 B	Pt23	1	青磁	碗	(14.0)	—	(2.4)				不良	灰緑黄色	灰緑黄色		
41 10 B	Pt1	1	土師器	小皿	8.2	6.7	1.2	ヨコナデ?	ナデ?	A B C	良	褐色	褐色		
42 1 B	—	一括	土師器	高环	(20.6)	—	(5.7)	不明	不明	A B C D	普通	黃褐色	黃褐色	口縁端部に黒斑あり	
42 2 B	—	一括	須恵器	环	(14.7)	(10.4)	3.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	E	不良	灰白色	灰白色	ロクロ回転: 不明	
42 3 B	—	一括	土師器	皿	(15.7)	(12.0)	(1.35)	ヨコナデ	ナデ?	A B C	良	褐色	褐色		
42 4 B	—	一括	土師器	盤	—	(7.0)	(0.1)	不明	不明	B C G	良	褐色	褐色		
42 5 B	—	一括	土師器	环	—	—	(0.3)	不明	不明	D G H	普通	浅黃褐色	浅黃褐色		
42 6 B	—	一括	土師器	环	—	—	(2.9)	不明	不明	A B C	普通	黃褐色	黃褐色	口縁端部内面に凹窓あり	
42 7 B	—	一括	土師器	甕	(19.2)	—	(7.0)	ナデ?	ヘラケズリ	A B C	良	褐色	褐色		
42 8 B	—	一括	土師器	甕	—	—	(6.75)	ハケメ?	ナデ?	A B C	良	にぶい褐色	にぶい褐色		

法量の単位はcm。( )書きは、残存と復原を表す。

胎土: A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黑色粒子 G雲母 H砂粒

第5表 出土石器観察表

回収番号	地点	遺構名	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
8 19	A	1号溝	-	一括	石斧丁	安山岩	4.6	(10.25)	0.9	60	一部欠損
18 7	B	7号住	5		磨製石斧	安山岩	13.4	4.5	2.85	230	
18 8	B	7号竪穴	17		石斧	安山岩	(15.9)	8.35	7.3	1840	欠損品
28 10	B	1号土坑	13		磨石	安山岩	(11.65)	(9.3)	4.9	810	欠損品
28 11	B	1号土坑	14		打製石斧	安山岩	(3.9)	(5.1)	(0.7)	15	欠損品
28 12	B	7号土坑	2		スクレイバー	安山岩	7.5	7.1	(2.1)	81.6	
30 1	B	集石I	1		打製石斧	安山岩	17.35	7.9	1.95	340	
35 1	B	集石5	1		打製石斧	安山岩	(12.6)	(12.55)	(4.0)	440	欠損品
37 3	B	包合層	13		打製石斧	安山岩	(6.2)	(5.8)	(1.3)	41.8	欠損品
37 4	B	包合層	17		二次加工削片	黒曜石	4.2	2.45	0.65	4.4	
37 5	B	包合層	1		打製石斧	安山岩	(7.8)	6.7	10.1	48.8	欠損品
37 6	B	包合層	24		使用痕削片	黒曜石	2.6	2.2	0.4	1.8	
38 7	B	集石2周辺	4		磨石	安山岩	9.75	8.2	4.2	530	
38 8	B	包合層	21		磨石	安山岩	10.2	7.8	4.4	535	
38 9	B	集石2周辺	2		磨石	安山岩	11.7	7.7	5.4	770	
38 10	B	包合層	26		磨石	安山岩	9.6	7.0	3.0	330	
38 11	B	集石2周辺	5		石皿	安山岩	21.2	22.75	9.4		
38 12	B	包合層C-13	25		石皿	安山岩	(18.25)	(14.05)	(3.3)	1170	欠損品
40 11	B	水田トレ3		14層	使用痕削片	黒曜石	2.9	2.2	0.65	3.0	
40 12	B	水田トレ		AX	磨製石斧	鈍鉱岩	(9.0)	4.5	2.85	200	
40 13	B	水田IIトド	-	一括	打製石斧	安山岩	(11.8)	7.6	1.7	190	欠損品
41 11	B	III19			削片	黒曜石	1.9	2.5	0.9	3.2	欠損品
41 12	B	4号竪穴		IV層	二次加工削片	黒曜石	2.05	1.6	0.4	1.0	
41 13	B	8号竪穴	4		石皿	安山岩	(9.2)	5.3	1.2	62	欠損品
42 9	B	-	-		スクレイバー	黒曜石	3.3	1.8	0.4	2.6	
42 10	B	-	-		使用痕削片	黒曜石	2.7	1.55	0.7	2.0	
42 11	B	-	-		二次加工削片	黒曜石	(2.45)	(2.3)	(0.5)	1.4	
42 12	B	-	-		打製石斧	安山岩	(5.9)	7.2	2.35	97	欠損品
42 13	B	-	-		打製石斧	安山岩	(5.0)	(4.55)	(1.65)	33	欠損品
42 14	B	-	-		削片	安山岩	3.95	5.9	1.3	25	欠損品
42 15	B	-	-		使用痕削片	黒曜石	4.05	7.5	1.3	36.6	

第6表 出出土製品観察表

神奈川番号	区名	番号	層位	器種	法量		調整		胎土	焼成	色調	備考
					長さ	高さ	厚さ	外面				
8 17	A	No.4		ナイゴ羽口	(9.2)	(7.6)	1.6	不明	不明	F	良	内面：暗灰褐色→赤灰色 外面：明灰褐色→灰褐色 外面に鉛附着
8 18	A	No.2		ナイゴ羽口	(5.3)	(5.0)	1.8	ナデ	不明	F	良	内面：黑褐色→にじいろ 外側：灰褐色 外側に鉛附着
12 17	B	3号住	No.26	筋縫車	外径 (4.75)	内径 (0.8)	1.1	不明	不明	ABF	良	黒褐色 欠損品
40 10	B	水田トレチ	14層	土鉢	4.05	輪2.6	2.45	ヨビオサ エ工後ナデ	不明	BH	良	黄褐色 玉：11.5×0.85

法量の単位はcm。( )書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

# 写 真 図 版

写真図版 1



ウッドコンビナート計画地（Ⅰ期工事）空中写真（東より）



調査前風景



全景（南から）



全景（北から）



調査区北壁土層



1号溝



2号溝



フイゴ羽口出土状況

写真図版 3



全景（真上から）



1号竪穴住居（南から）



1号竪穴住居と1～4号据立柱建物



2号竪穴住居（南から）



2号竪穴住居カマド



3号竪穴住居（真上から）



3号竪穴住居（南から）



4号(A・B)竪穴住居（南から）



4号B竪穴住居カマド



5号竪穴住居（南から）



5号竪穴住居カマド



6号竪穴住居（南から）



6号竪穴住居カマド

## 写真図版 5



や号竖穴住居と11号掘立柱建物（真上から）



7号竖穴住居器出土状況 1



7号竖穴住居器出土状況 2



7号竖穴住居器出土状況 3



8号竖穴住居（南から）



8号竖穴住居カマド



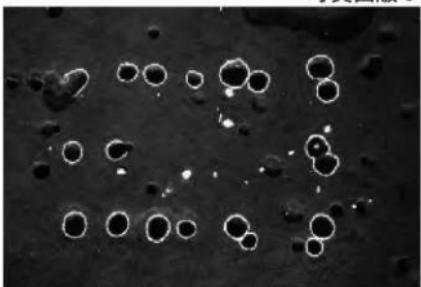
8・9号竖穴住居および12号掘立柱建物（真上から）



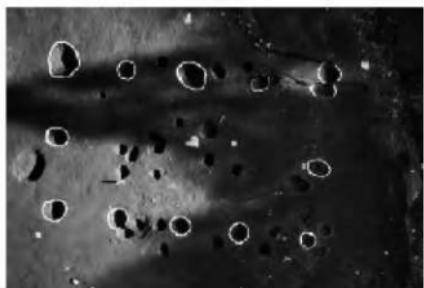
9号竖穴住居（北から）



4～6号掘立柱建物と2～6号竪穴住居（真上から）



8号掘立柱建物（真上から）



9号掘立柱建物（真上から）



10号掘立柱建物（真上から）



1号土坑（北から）



1号集石



2号集石



3号集石

写真図版 7



4号集石



4号集石切り取り風景



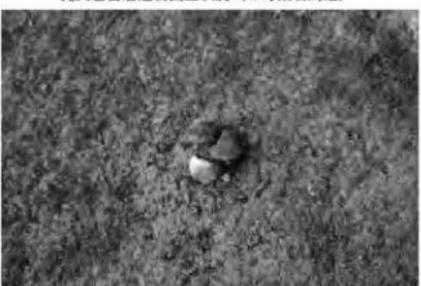
5号集石



縄文包含層遺物出土状況（2号集石周辺）



1号集石打製石斧出土状況



縄文土器出土状況（2号集石周辺）



プラントオパール試料採取風景



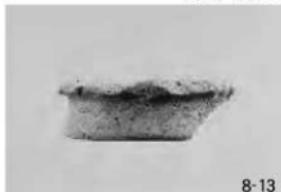
水田層とプラントオパール試料採取位置



8-4



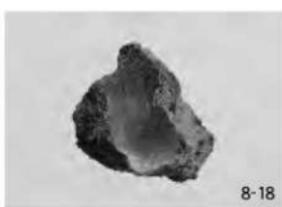
8-6



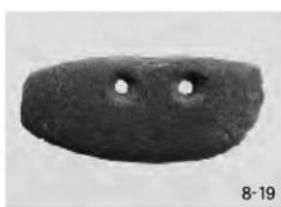
8-13



8-14



8-18



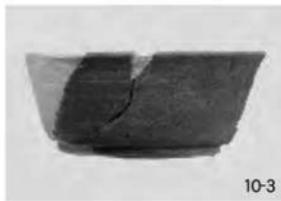
8-19



10-1



10-2



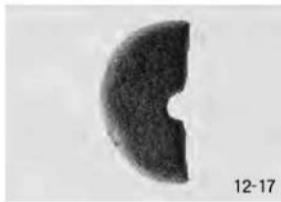
10-3



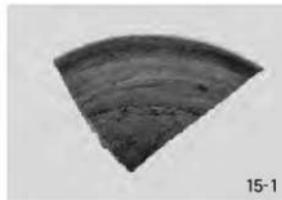
12-1



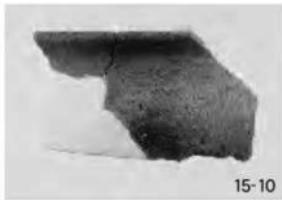
12-10



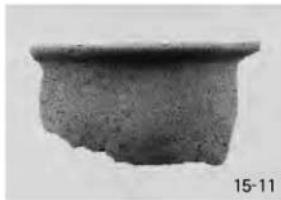
12-17



15-1



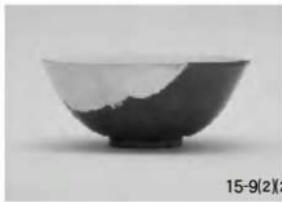
15-10



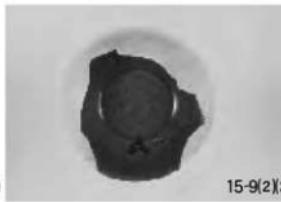
15-11



15-8

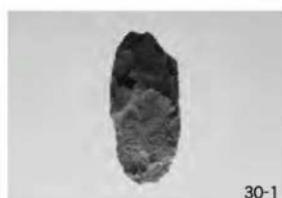
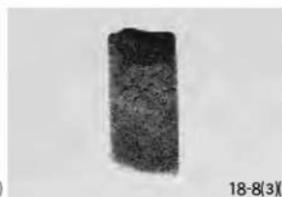
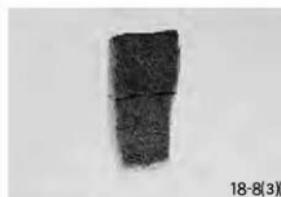


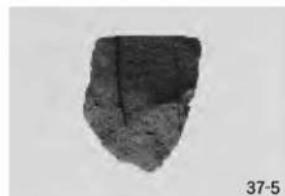
15-9(2)(2)



15-9(2)(2)

写真図版 9





37-5



38-7



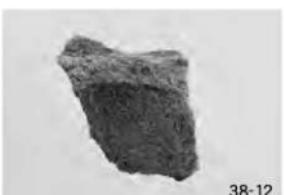
38-8



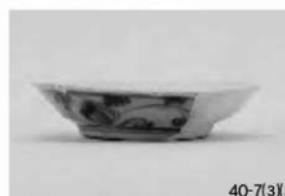
38-9



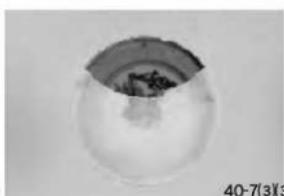
38-10



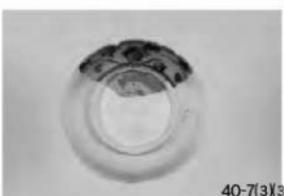
38-12



40-7(3)(3)



40-7(3)(3)



40-7(3)(3)



40-6



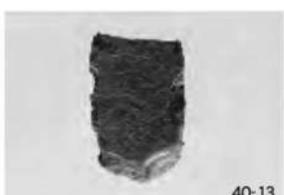
40-10(3)(3)



40-10(3)(3)



40-12



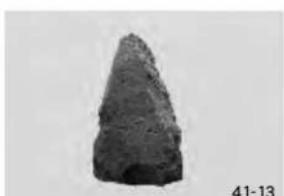
40-13



41-7



41-10



41-13



42-9

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	いしがさこいせき
書名	石ヶ迫遺跡
副書名	ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	49
編著者名	行時桂子
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石ヶ迫遺跡	大分県日田市 大字東有田石ヶ迫 ほか	44204-6		130°19'32.46"	130°58'16.84"	19950804 ～19960328	13,000m <sup>2</sup>	ウッドコンビナート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石ヶ迫遺跡A地区	集落	奈良・平安	溝3、水田	須恵器・土師器・フイゴ羽口	
B地区	集落	縄文 古墳 奈良・平安 ～現代	竪穴住居9、掘立柱建物13、 土坑7、落とし穴遺構1、 集石5、水田、包含層	縄文土器、石器、須恵器、土師器、土製品	

### 石ヶ迫遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第49集

2004年3月31日

編集　日田市教育委員会 文化課  
 〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1  
 発行　日田市教育委員会  
 〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1  
 印刷　尾花印刷有限会社  
 〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8